
LL (Love Lab)

のらねこ きぢとら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LL (Love Lab)

【Nコード】

N0909I

【作者名】

のらねこ きぢとら

【あらすじ】

空間の歪みを諸に食らう絶対神。その歪みのキーパーソンである東郷白夜の前に、三千世界の管理者である、所謂『天使』が現れた。敵か味方か？ともかく日常は波乱万丈。ちょっとラブで、些かオタクで、潔くコメディ。

第一話の二

東郷白夜。

十七歳なりたての高校二年生。

ちなみに誕生日は四月一日。エイプリルフール

家族は病院からの出産連絡を

『またまた〜。騙されませんよん』

と一笑で片付けた。

そんな彼がただいま人生の絶頂期を迎えようとしていた。

家族の出払った自宅にて同級生の女子と二人つきり。

昼間暇つぶしに出かけたウィンドウショッピングで出くわした女子は白夜の駄目元の誘いに二つ返事でついてきた。

別に気があったとか、モーションを掛けていた相手ではないけれど、据え膳食わぬは男のなんとか。

それまで引きも切らなかった話題が途切れ、雰囲気もいい具合に妖しい。

「・・・東郷くん」

タイミングを見計らったように舌ッ足らずな声で名前を呼ばれ雰囲気
気に泥酔気味の顔が向けられる。

世界は我の手中にありッ！コングラッチュレーション俺ッ！我、幸
福の霸王なりッ！

惜しめない賛辞で己を讃えながら、白夜はリップ艶めく唇にロックオン、いざ体を傾きかけ、

「白夜いる——う？」

最近本命としてモーションを掛けていた少女の乱入に阻まれた。

絶対零度の極寒を味わうのは白夜だけで、室内は少女二人から発せられる殺気で大爆発を予感させる気圧上昇。

「なんなのアンタ。」

「アンタこそ誰よ。」

「……あ、ヤメテ引火する。」

二人の間でビチビチと飛び散る火花に弱弱しく突っ込んでみたものの、見事にスルーされた。

いきなり始まった少女二人の罵りあいの取っ組み合いに、白夜は控えめな悲鳴を上げて戦線離脱。
一目散に家から飛び出した。

「はあ、もうなんでこうなるかな。」

繁華街まで出てきた白夜は歩道沿いのベンチに腰掛け、ひとりごちた。

二重のくつきりした瞳が印象的な端正な顔立ち。
背はそこそこあって、体系はややスリム。
インドア派が高じて肌は白目。

異性に言わせると少女マンガの順主役のような少年、つまり主人公の少女に惚れたり惚れられたりする役どころだ。

多分とは謙虚な物言い、実際かなりモテル。

然して親しくもない近所のオバちゃんに根拠もなく将来有望ねと太鼓判を押され、物心つく前から駄菓子やら、手紙やら、ドロ団子やらと年齢問わず貢物が集まった。

だが実際、過去を紐解いてみれば初々しくも清い人生。

優柔不断と軽薄さが災いした今回はさて置き、いい感じで付き合っていた彼女がいきなり転校↓自然消滅。突然の交通事故で入院を余儀なくされた彼女は、病院で知り合った男とよい仲になり↓・・・。デートの最中に偶然出くわした母親の悪意なき暴言に、決るような右フックの分かりやすい絶縁状を叩きつけて立ち去った彼女、などなど。

早い同級生など脱サクランボ、I、m完熟ドールバナナを声高に公言している中、初体験はおるか女子とまともに手さえ握ったことがないのはどうよ。モテル、モテ捲くっているだろう、というレッテルがあるだけにこれはイタイ。

ここまでくると誠実な男女交際など二の次。
もうどうしても、何でもいいから経験した〜いッ！と思ひ詰めるのも致し方ないだろう。と思う。

時は休日の宵口。

目の前を行くカップル達は逢瀬の終わりを名残惜しむように吸着し、イチャこいている。・・・ムカツク。

慌てて飛び出してきたため財布も無いし、携帯もない。

つまりどこかの店に寄ることも出来なければ、友達を呼び出すことも出来なくて。

勿論、あの家には後一、二時間は帰れない。

合戦場跡地のごとき部屋を思い描いて重い溜息。母親にも怒られるかもしれない。

「くつらぁーい。さつきから溜息ばかり吐いてるね。」

般若を思い描いて眉を顰めていた白夜は突然掛けられた声に顔を上げた。

多分大学生くらいの、若い女の子が目の前に立っていた。

クルリと丸い目を愉快そうに細めてベンチに座る白夜の顔を覗きこむ。

「なんかヤな事でもあったのぉー？」

「・・・え・・・いや、その」

前屈みになった拍子に薄いキャミソールから胸の谷間といわずブラまでチラリ。

清楚なお嬢様風の装いに倒錯的な艶かしい黒レース。思わず視線が釘付けた。

「ね、君暇なら今から私と遊ばない？」

「や、でも俺何も持ってなくて・・・。財布も携帯も自信も経験も——」

「お金ないのー？・・・んーでも君ならオツケー。奢ってあげるから私の知ってるクラブ行こう。」

「・・・え、マヂ？」

白夜がきょとんとしている間にも女は強引に腕を取り、ネオン瞬く繁華街を歩き出した。

――捨てる神あれば拾う神あり

半地下のクラブ。

喧騒の闇に矢のようなスポットライト。

ブラックライトに浮かび上がるのは虚栄の笑みを刻む白い歯、そしてジャンキーの鼓動のような音楽。

「サイクル早ッ！タナカ君捨てたと思ったらもう次ゲットしたのお？」

「タナカ誰？ああ、あのやたらキザないけすかねえ美容師？」

「つか、この子わかあーいかわいー。」

ユリちゃん（花の大学生・21歳）につれていかれたクラブには彼女の友達が数人いて、白夜は新しいペットとして紹介された。

「若いの。やり捨てされないように気をつけなね。」

「やり捨て・・・っ」

友人の赤裸々な科白に白夜、思わず絶句。

なんて魅惑的なお言葉か。コチラこそ三つ指ついでお願いしたい！！

「いやん。みんな意地悪うい。気にしないでねん。みんな白夜が可愛いから嫉妬してるのよ。」

「え、あ、うん。全然気にしてないヨ。」

命一杯期待しています。

白夜はニツコリ王子様スマイルで応えつつ、内心大きくガツツポーズする。

蓄膿気味の子猫は腕に擦り寄り一頻りゴロゴロと喉を鳴らした後、飲み物を取ってくるといってフロアの人ごみに消えた。

残された白夜は友人等と他愛無い会話で盛り上がったが、顔見知りの男友達が二人交じり会話がバラけたのを頃合に、中々帰ってこないユリを探しにフロアへ出た。

スローテンポのナンバーに合わせ人々は深海の海草のように揺らめいている。

魚にもなった気分で白夜は人ごみをすり抜け、入口付近まで来て破顔した。

入口の扉左に、レストルームへ続く通路があつて、そこにユリの姿があつた。

ナンバーがアップテンポに変わり、ミラーボールが動き出す。

万華鏡のような色とりどりの光のシャワーを祝福の光のように一杯に受け止める白夜にユリの視線が移る。

姫を迎えに来た王子様、もしくはご主人様を捜す忠実な子犬に、年上の彼女は余裕ある微笑で応え――るはずが、なにやら顔を強張らせ、スイツと視線が外された。

胸囲測定のように宙ぶらりん諸手を挙げたまま白夜は凍りついた。暗くて最初は気付かなかったが、よく見ればユリを壁に拘束するように男が迫っている。

まさか元彼とか？

条件のイイ男に鞍替えしたとか？

ともかく迫られているユリに困惑の色はない。寧ろ、追ってきた白夜の存在こそが鬱陶しそうだ。

棚ボタ王子、名もなき平民の謀反により一気に不幸王子へと地位没落か！？

—— ってか、エエッ！まさか俺コイツに負けるのッ？

ユリの脇に手をつき身振り手振りでトークする男は、目算160センチ弱のユリより身長が低い。

その上、オメデトウございます妊娠八ヶ月くらいですかぁ〜？と声をかけたくるような下っ腹で、細身の黒スーツが痛々しい。

極めつけはデカイ頭をより一層デカク見せるアフロヘア。

はちきれんばかりの肉に全てのパンツが埋もれているような顔はア。パ。マンに通じる愛嬌があるのに鼻の下の男爵髭（所謂、ちよび髭）が妙な胡散臭さを演出している。

常に男を磨くことを目標にしている、というか、彼女ゲット（その暁に目くるめく体験を！）のために日夜お洒落を追及し、笑顔の鍛錬を怠らない白夜にとって、これは人生観どころか存在価値をも崩壊させる大打撃だ。

「ね、ねえ。もう外にだよ。ユリ早く静かな場所で二人っきりになりたいナ。」

待て待て。貴女様のワンコが置き去りですが？

「トモダチはいいのかい？」

前髪を鬱陶しげに払うなアフロのくせにッ！

「うん。ぜえんぜんへーき。」

いやいや、全然平気じゃないんですけど・・・俺。

「フツ、せっかちな子猫ちゃんめ。」

・・・（殺意）

早くうと甘えた声で腕を揺するユリのデコを芋虫みたいな指がちよんと突いて、二人は扉へ歩き出す。

擦れ違い座間、男が人ごみに立ち尽くす白夜を一瞥して——ニヤリ。

勝者にトドメを刺された白夜は足元からガラガラと崩壊しフロアの藻屑となった。

「うっう・・・なんでこうなるの」

フロアに泣き崩れた白夜は、何度かうっかりと通行人に踏みつけられて場所をトイレに移し心ゆくまで暗涙した。

鼻歌混じりにトイレの扉を開け放った人達は、トイレの片隅に蹲って泣く白夜に一瞬驚き、ある者は奇異の視線を向け、ある者は同情的な慈悲深い視線を向け、一様に腫れ物に触るような扱いでトイレを去っていった。

一頻りドツボに嵌った白夜は氣を取り直し帰宅することにした。

会計が先払いだったことを不幸中の幸いと前向きに考える。

イトコロで女に去られるのはいつものことなので悲しいほど割り切りは良い。

今回に限っては対戦相手に食らったダメージが少々大きかったが・・。

近道なので地下街を通り抜ける。

終電間近の駅近郊は通行人がチラホラと残っていたが概ね閑散としていた。

さあ、落ち込んでなどいられない家に帰ったら部屋の復興だツ！

なんとも悲しい鼓舞で顔を上げ、白夜はゲツと呻いた。

デパ地下のシャッターが降りたウィンドウの前に男が立っていた。

物憂げな表情で壁に凭れスラックスのポケットに片手を入れる姿はやる者がやれば絵的に決まるが、いかんせんチビデブアフロの男がやるには無理がある。

笑いを誘う、を通り越し少タイタイ。

いわずもがな先ほど白夜から女を奪い奈落に突き落とした張本人だ。

白夜に気付いた男は口に咥えていた白い棒を取り、ゆっくりと体を持ち上げた。

格好をつけてというよりハアどっこいしょ、とかけ声が聞こえてきそうな仕草だ。

男を見詰めていた白夜はお節介と思いつつ進言する。

「あの・・・ロリポップキャンディーは普通に端を抓んだほうがい

「と思うんだけど。」

口元を挟んだら指の股がベトベトになります。

「仕方ないやんけえ地下街は全面禁煙なんやから。てか、氣遣いおおきに。若いのに感心なやつちゃんあゝ。」

「うう、コテコテの関西弁。どこまで色物キャラだ。そのくせ妙に常識を兼ね備えたい人っぽい・・・」

「あつたりまえや。こう見えてもワシ天使やからのう！」

範疇外の科白に白夜の思考が一瞬フリーズする。

「で・・・電波系？」

「あゝ今のは冗談、イツツジョークツ！確かにコツチじゃ天使や言われとるけど、単なる管理者やし？一度言ってみたかっただけやん。そんな突っ込まんといてな照れるやんけ。」

照れ隠しにバタバタ手を振り身を振る様は猟奇的な人形のようなだ。子供が見たら喜ぶどころかまず泣く。

「っていうか、何気に天使は否定しないんだ。」

「せや。コツチでいう天使ちゅうんはアレやろ？頭にワツカ乗せて背中に白い羽生やした。そんならワシ持つとるで。」

「持つてるって・・・え、ちよつと産まれるのツ！？」

得意げに言ってクルリと背を向けた男がムンと力みだし、白夜は慌てた。

「うわゝ俺ダンナでもないのに感動シーンに立ち会っちゃっ・・・」

男の肩甲骨の辺りのスーツが小さく裂け白いものがニョキリ、頭角

を現す。
そして

ぼん

マヌケな音を響かせて広がった。

白い羽は大人の掌サイズ。亜熱帯植物の双葉とか、相撲取りの手形とか？

啞然とする白夜を一顧だにせず男はいそいそとポケットを漁り金の輪を取り出し頭上に翳す。

輪は手から離れ、ユラユラと心許なく微震するものの落ちる様子はない。

まるで超伝導で浮いた磁石だ。

「……マジシャン？」

男は白夜に向き直り偉そうに胸を張った。

「ワシは三千世界を管理する絶対神の管理職者や。ちなみに所属はジェネラリーエンジェル。羽と輪は一般天使になると上から与えられるいわば正装やな。主なる仕事は個人的な守護で、現在この界限三町くらいを請けもつとる。勿論、お前も管理対象やで。」

「ハア……」

白夜は溜息のような相槌を打つ。

「時にお前さん世界が破滅する聞いたらどない思う？それがお前さんの存在如何で救われるちゅうたらどない？」

「宗教の勧誘なら興味ないんで」

白夜は視線を外し、踵を返した。

「待て待て。これは冗談でも宗教の勧誘でもないで。破滅は言いすぎかもしれないが、お前の存在はかなりヤバイっちゅーねん。お前さん核兵器どない思う？」

突飛なところにとんだ話に白夜は思わず足を止めた。

「確かに最強の武器には違いないが、同時に脅威やん。ま、お前がどう思っとるかはさておき、周りはどう思うやろな。世界平和を名目に核兵器の廃止を声高に叫ぶやる。そのうち実力行使に乗り出すかもしれへんな。」

「・・・それが俺とどーいう関係？」

「だから、お前はこの三千世界の中の核兵器的存在のうちの一つや言うことや。使い道がないわけやないけど管理が面倒やから無くしちゃまおうか、て思う・・・いやいや、思われとんのや。」

「え？な、ナニ無くすってッ！俺を亡き者にしようとか言ってるの？」

白夜はいきなり慌てた。

天使だとか三千世界だとか鵜呑みにしたわけではないけれど、生命の危機に晒されているらしいことを聞かされてはつかつかしていられない。

動揺する白夜に自称天使の胡散臭い男はキラリと白い歯を見せ、力強く親指を突き立てた。

「安心せい。ワシはそんな憐れなニンゲンをほっておけない慈悲深い性質なんや。決してお前のようなボーナスゲッターを上手く管理できた暁にはワシの査定が上がって昇給・昇進するからとか、そんなん考えてないで。」

「なんかあからさまに白々しいし。大人社会のダークサイドを目の

当たりにした気分。」

「ま、ともかくや、目立つと上から抹殺命令が下るからなるべく平常心を心がけることやな。」

「抹さ・・・へ、平常心でどーいう事ッ？」

生々しい危機感に顔色を失った白夜はワラにも縋る思いで男に取りすぎる。

男はどーでもよさそうな顔で耳をかつぱじり、爪の間の垢をふいつと一吹き、

「破滅へのキーパーソンはニンゲンの禍福度。平たく言っちゃまうと感情とか気分つちゅーやつや。お前さんは何がなくとも前向き（アツパー）系やから禍福ゲージをプラマイ0に保つためにワシは常々不幸を与えてんのやけどな。」

「パードウン？かふくげーじナニ？ってか不幸で・・・」

思い当たらないでもない節に白夜は眉を顰める。

「なーひよつとしてさつき女搔つ攫つたのも故意？どころか人生通して女運悪いのもみんなオマエのせいかーッ！」

「人聞き悪いつちゅーねん。『全て』ではないで。『ぼちぼち』や。」

「くわっ！思いがけないクロスカウンターを浴びてノックアウトな気分。ソレ、何割かは俺に敗因ありって言ってますかッ？」

「そない自虐的になりなさんな。」

「否定しないし！妙に視線が同情的だしっ！」

うわーん、と地下通路に木霊する泣き声に、ぴろりろりろと携帯の着信音が重なる。

「もちもち君の可愛いエンジェルちゃんでちゅよ。野暮用？あ

あ、終わり終わり。ああ〜ん。直ぐ行くから待っててな子猫ちゃん。

「俺が核兵器なら今すぐ世界を放射能で汚染してやりたい心境だ。」

心底忌々しげに呟く白夜に、電話を切った男はお座成りに肩を竦めてみせた。

というか首を消したようにしか見えなかったが。

「とりあえず最近ボーナスポイントが増したから気いつけてな。ま、ワシが守護しちよるからイカダに乗った気で安心しとれ、と伝えに came。ほな、ロンリーな子猫ちゃんがウェイトしてるでワシ行くでえ。」

「イカダ微妙ッ！ってかボーナスポイントって何ーッ？」

白夜は叫んで男に飛びかかった。

しかし自称天使のメタボは身軽だった。

掴みかかる白夜の腕を一流ボクサーのように掻い潜り、と殺場から逃げた豚のように一目散に地下道を駆けて消えうせた。これぞ遁走。

「……っていうか何気に喋りがルー大柴なのは何故？」

関西弁かと思っていた方言も甚だ怪しい……。

第一話の二

ホームルームが差し迫った教室で、早々と自席に着いていた白夜はくわつと堪えきれない欠伸を零した。

ソレを目ざとく見つけた隣のクラスメートが茶々を入れる。

「昨日もお盛んか？コノツ羨ましいヤツ。」

「えゝゝゝそんなんじゃないよ。ちよつと夢見が悪かつ——」

「だよな。昨日、隣のクラスの女子連れ込んだら別高校の彼女と鉢合わせして修羅場つたんだって？」

前席のクラスメートがひよこつと話に入ってくる。

からかう気満々の黒い笑みに白夜は顔を顰める。

「なんでそんなこと知ってんの？」

「その他校に知り合いがいて筒抜け。どころか隣クラスで大々的に武勇伝が語られていた。」

「あーそー」

ハアッと白夜は溜息を吐き、机に突っ伏した。

「まあ確かに戦場の後片付けは大変だったねえ……。帰宅早々、見ず知らず女子二人の取っ組み合いを止めた母さんには説教食らわされるし、ソレを見ていた妹には馬鹿にされるし……」

だがそれも身から出た錆と思えば甘受できる。

しかし、いきなり降って沸いた自称天使の『三千世界の核爆弾的存在』なる宣言は納得しがたい。

そんな荒唐無稽な言いがかりで抹消されようとしているなんて理不尽にも程がある。

ぶつけどころのない憤りと自称天使の残した数多の疑問を抱えて眠りについた所為で熟睡叶わず夢多きレム睡眠だった。

花咲き乱れる天国で美少女天使たちを侍らせたイツツ、ハーレム。金髪碧眼、ブルネット、亜麻栗色と美女は選り取り見取り。石膏像のように均衡の取れたナイスバディーに奔放な性格。美女たちは白夜の寵愛を得るべく競って色気を振り撒きあれやこれやと迫ってきた。

これぞパラダイス。

苦悩の最中にそんな夢を満喫できることこそがアッパーといわれる所以だが、その辺りに自覚はない。

ともかく夢といえども絶頂ウハウハな世界は、突然降って沸いたチビデブアフロのオッサンが根こそぎ美女を掻っ攫っていったところで終わったので夢見が悪いことといったらこの上ない。

チャイムが鳴り生徒が軒並み席に着いたところでタイミングよく教室のドアが開け放たれた。

「オッハ————ア！」

はて？

担任は人生達観の域に到達したジイサンで、渋みを通り越し出がらしのような声だったはずだが？

一様にぎよつとし、教壇に顔を向けた生徒は思わず声を洩らした。ほおう、わぁおという好意的なものは概ね男子で、ケツ、チツという声ともつかない擬音は概ね女子だ。白夜もご他聞に漏れず前者だ。

白いブラウスがはちきれんばかりの豊満なバスト。黒いタイトスカ

ートを盛り上げるヒップに肉感的な二の足。整った顔立ちは真っ赤なルージユが官能的で、思わずそのヒールで踏みつけて下さいとお願いしたくなるような美女だ。

「えーいきなり今日からこのクラスの担任を受け持つことになりました天子です。今まで担任をしていらした根岸先生は、先生は・・・うっ。」

え、何かよからぬことでも？

と最悪な事態を思い描いて青くなる生徒に、天子はけろっとして

「唐突に第二の人生を求めてセミリタイヤしてしまいました。あの歳で今更第二の人生もネーだろ、セミっつーよりミディアムじゃん、と内心で突っ込んだアナタ、人生の砂時計はそれぞれ進み方が違うものよ。」

説教染みた説明で安心させた。

「というわけで、根岸先生が担当をしていた社会科も私がそっくり受け継ぐことになりましたので、みなさんよろしくねん。」

バッチンつと睫の音が聞こえてきそうなウインクに男子生徒は桃色吐息、女子生徒は怒気を吐き捨てる。

他の男子生徒同様、うつとりと見蕩れていた白夜はその矢先に教壇から向けられた視線にドキツとした。

だが、制御の余地もなく赤らんだ顔は次の瞬間青くなる。

「ふんぎゃあああああああ——」

黒板を割るような奇声に教室内の視線が集中する。

白夜は腰を中途半端に浮かした状態でアワアワと戦慄いた。

「どうしたの？東郷白夜くん？」

妖艶な瞳が魅力的だった顔が見覚えのあるアフロのものに挿げ変わっている。顔だけ。

しかし、そう見えているのは白夜だけらしく、生徒の怪訝な視線はうろたえる白夜のみに向けられている。

「えー？ナニナニ？白夜と知り合いなのセンセ？」

教室内のどこそこから上がった質問にナイスバディーの上に乗った男の顔はにんまりと笑った。

「東郷くんとは一足先に昨日会ったわね。高校生の分際で繁華街にいるなんて悪い子ちゃん。だけど安心して。私はそんな悪い子ちゃんを救うために教師になったのだから。」

天子の力説を褒め称えるものはいない。

寧ろ嫉妬や妄想、敵意や憎悪といった負の感情が異常発生して渦巻く。

ちなみに前者は概ね男子で後者は概ね女子の感情だ。

笑った拍子にパーツが全て肉に埋もれた顔に白夜はアウアウ呻きながら教室の後ろへ後退した。

それを見て、ちょび髭アフロは肉感的な腰をぷりぷり振って近づいてくる。

「あらあら。どうしたのかしらボウヤ。ひょっとして昨日と雰囲気が違うから驚いているのかしら？・・・女はね状況によって変身する生き物なのよ。そう、まさにカメレオン。」

雰囲気どころか骨格から変わっています。

昨夜のことは全て電波系インチキマジシャンの戯言と一蹴したのだが、そういうわけにも行かなくなった。

すると自称天使を名乗るこの男は自分に不幸を齎す患者以外のなんでもなく、抹殺するも何もかもコイツの所為のような錯覚に陥る。

ともかく、ナイスバディーのオッサン顔というミスマッチが殺人的に気持ち悪い。

ただでさえ女運が悪いのにこれ以上トラウマなんぞ抱えてられない。

女郎蜘蛛は追い詰めた獲物に無慈悲に手を伸ばしかけ、次の瞬間弾かれたように振り返った。

視線の先は廊下側の一番後ろの席。

黒井音子だ。

日本人形を思わせる真っ直ぐな長く黒い髪。顔の半分が前髪に覆われまるで表情が読めない。

はしゃいでいる姿どころかクラスメートと会話しているだけで天変地異の前触れと揶揄され、常に自席に着いて何事かノートに書き続けている。

周囲の奴等はカリカリカリカリと続く音にいつ黒魔術の魔方陣が完成するのかと気が気ではない日々にノイローゼ気味だ。

血色良いちよび髭顔が見る間に青褪めていく。

いきなり踵を返したかと思いきや生徒に向けて宣言した。

「ホームルームはコレにてお仕舞いッ！一時間目の授業も自習。」

状況についていけない生徒のことなどお構いナシに、天子はスツタカタツタと教室を飛び出していった。

第一話の三

唐突に与えられた一時間の^{サビスタイム}自習時間。

まともに勉学に勤めるのは極少数派で、大抵の生徒達は内職に勤しみ、四方山話に花を咲かせる。

その日に限っては当然のように会話は天子のことに集中した。

その中、白夜といえば、他生徒（特に男子）の嫉妬交じりの冷やかしかし、（主に女子からの）見る目のなさや軽薄さの論い、と言った集中豪雨に晒されながら別のことを考えていた。

気構えもないままの思いがけない再会にうっかり肝を抜いてしまったが、及び腰になっていない場合ではない。何せ、生命が危険に晒されているのだ。

胡散臭いとはいえ現状ではあの天使が唯一の理解者。

ともかくアイツをとつかまえて、戯言と唾棄した三千世界の云々といった話を一から聞きなおさねばなるまい。

チャイムと同時に白夜は廊下へ向かった。鼻息荒く扉を開け放ったところで廊下を歩いていた女子とぶつかりそうになり、慌てて避ける。

「うわっ、ごめ・・・」

謝る白夜の顔が、途端にだらしなく緩む。

ぶつかりそうになったのは桃瀬香里で、桃瀬は胸を押さえ驚いた、といわんばかりに黒目勝ちの瞳を丸くしている。

月並みの表現で甚だ申し訳ないが、マシユマロのようなぼわわした白い頬に、小動物を思わせる黒く大きな瞳、桃色のぶつくりとした唇が魅力的な正統派美少女だ。

桃瀬は誰隔てなく話が出来る気さくな娘で一年の時に同じクラスだった白夜とは今でも機会さえあれば話しをしてくれる。

ミーハーなタイプではないので噂といえども白夜とどうこうといっ

た関係になつた試しはないが・・・。

周囲の噂に反してまるでモテないことを自覚している白夜に、学年どころか、校内でも五本の指に入ると謳われる高嶺の花を手折ろうとする野望はまるでなく、他同様、憧れの領域のヒトだ。

「ごめん。俺急いでて。大丈夫だった？」

「うん、へーき。私も余所見してたから・・・」

くう、カワイイッ！

ふんわりとはにかむような微笑に白夜は内心で拳を握り、ジーンと感涙する。

だが、束の間の幸せは端然とした質問で現実に戻された。

「白夜君、お隣のクラスの女子フツたんだって？しかも二股で。」

「う。それは、いや、その・・・なんで桃瀬が知ってんの？」

「当事者が今朝、学校中に響き渡るような声で憤りを叫んでいたから。」

「・・・そう。」

あの女は社会的に俺を抹殺する気なのか？

白夜は頂垂れてふうと溜息をついた。

「や、なんつーか二股とかではない、と思う。（別に付き合ってたわけじゃなかったし。ドツチとも。）そ、それに（まだ）何も、何もつ、なあああんにも！なかったし！手すら握ってないし（キスは未遂だけど）・・・ドツチの子とも。」

「やつぱり。そうなんだ。」

我ながら苦しい言い訳だ、と思いつつ必死に抗弁していた白夜は、そのあつけらかなとした返事に「へ？」と間拔けた顔を上げる。

桃瀬は確信的に頷く。

「白夜君の気持ちを勝手に勘違いしちゃった女友達が鉢合わせて、勝手に盛り上がっちゃったんだね。そうだと思ったんだあ。」

・・・勘違い、なのでしょいか？

このタイミングで「その気が山盛りありました」と白状出来るほど豪胆ではない白夜は口を噤む。

桃瀬は胸の前で小さな白い拳をきゅっと握った。

「ドンマイッ！白夜君が格好いいから、白夜君にその気がなくても女の子達は期待したくなっちゃうんだよ。でも、白夜君は二股とか、体目当ての軽薄な恋愛するような人じゃないって、私はちゃんと分かってるからあんまり誹謗中傷に落ち込んじゃダメだよ？」

ちよこんと小首を傾げる仕草のなんと愛らしいことか。

「アリガト。桃瀬にそーいわれると俺すごく嬉しい。元気出た。」

白夜は過去をまるっと棚上げして、桃瀬の人物像どおりの良い少年の笑顔で応える。

桃瀬は元気を取り戻したらしい白夜にほっとした様子で徐に視線を外しポソリと呟いた。

「・・・私も、良かった。」

「え？今なんて？」

「つてか、それはナニに対して？」

モゾモゾと芽吹いた期待に胸を膨らませ、白夜は必死に問い返す。

その頭上でチャイムが鳴った。

途端に、桃瀬が慌てる。

「ああっ、どうしよう授業が始まっちゃう！ゴメンネ白夜君急いでたのに」

「や、あの・・・それよりさっきの・・・」

「今からでも急いだほうが良いよ！トイレ。」

「ね、それよりさっきの・・・トイレ？」

思わぬ科白に白夜は思いつきり眉を掀る。

「さっきものすごく真剣な顔で急いでたもんね。腹痛ならちよつとくらい遅れても先生も許してくれるよ。遅れることなら私がクラスメートに伝言頼んであげるから。・・・あ、そのアナタ、ちよつとお願いしてもいい？」

「や、違う、桃瀬・・・」

俺が真剣な顔をして急いでいると何故トイレか。

桃瀬の持つイメージに少々不満を覚えつつ、白夜はサクサク進む桃

瀬に慌てた。

桃瀬が伝言を頼んだのは黒井音子で。多分一番近かったからという理由だろうが、気さくにも程がある。

桃瀬の頼みに音子は一度手を止めた。

鬱陶しい前髪で表情が見えないものの、口元を見る限り無表情のまま暫く桃瀬を凝視し、やがてコクリと頷いた。

満足げな桃瀬に促され白夜は行きたくもないトイレに向かう羽目になり。

便意もなく便座に座り、一人、意味深な桃瀬の科白と、桃瀬の持つ白夜人物像について唸り声を洩らすことになった。

その頃教室では――

チャイムの暫く後で教室に教師が現れた。それと同時に教室の際奥、廊下側で黒い影がユラリと陽炎のように蠢いた。

「ど……どうかしたか黒井？」

ああ、とうとう魔方阵が完成したのだ。教室ごと異空間へ飛ばされるのか、それともマッドモンスターの召喚か？

極度の緊張感に張り詰める教室に、意外とよく通る声が抑揚なく告げた。

「東郷白夜、腹痛によりトイレに向かい遅刻。伝言を頼まれた。ニヤリ。」

「……な、何故そこで笑うんだ？黒井？なあ、く、黒井？」

ワラにも縋るような思いで問い返してみたものの、一瞬だけ不気味に釣りあがった口は何も語らず、音子は着席した。

授業は喻えような不安の中、お通夜のように鬱々と進められた。適当な頃合に教室に戻ってきた白夜は、極度の恐怖に晒され続けたクラスメートに

「オマエが下痢ごときで伝言なんて頼むからッ！」

と理不尽な八つ当たりを受け、目を白黒させた。

第一話の四

休み時間のたびに色々と阻まれ、結局白夜が本格的に搜索に乗り出したのは昼休みになってからだった。

何処に行ってもナイスバディーの臨時教師の話題で持ちきりだったが、肝心の本人は見当たらない。

昼休みも残り少なくなり、諦めモードで寄りかかった窓の先に白夜は目的の人物を見つけ、駆け出した。

「アンタ一体こんなところでナニをやってたッ！」

パンツと勢いよくドアを開け放ち、屋上に出た早々怒鳴る。

天子——曰く自称天使の胡散臭いちよび髭アフロは、生徒の出入りが滅多にない中校舎の屋上にうつ伏せ、金網越しに双眼鏡で隣の校舎を覗いている最中だった。

「ばっか。見つかつてまうやろが。早よしゃがめ、しゃがめ。」

「一体何見て……」

白夜は言葉を飲み込み、頬をぽつと染めた。

校舎は概ね三棟。中校舎と程近いところにある中校舎第二は、以前北校舎とされていたところで、現在は通路でコノ字型に繋がれ中校舎の一部に含まれる。現在は増築によりその向こうに新北校舎が建てられている。

中校舎第二は特別教室が集められていて、眼下の二階の窓に短パン姿の女子が見えた。

更衣室だ。

中校舎の北側は壁が多く、窓があっても準備室ばかりで常にカーテンが布かれているため、女子たちは警戒心もおろそかに窓を全開にして着替えをしていた。

「うわぁーいけないんだ。似非とはいえ一応教師とか天使とか名乗ってる奴がノゾキかよ。ってかやつぱり天使にも性欲はあるんだ・

」

「とかいつてちゃっかり凝視してるヤツに言われたかないわい。」
しかめっ面で振り向いた天子は、ぼよんと幻の効果音を響かせて
顔だけ元に戻した。

「この方がオマエさんも無駄にトキメかんでええやろ。」

「うう・・・ならばいつそ体も元に戻してほしい。」

「ここなら誰にも見られんと思うが、万一のためや。」

自称天使は白夜の訴えをあっさりと退ける。

「大体、誤解やで。ワイは覗きとちゃう。どうせ覗くならもっとボンキュボンのグラマラスなねえちゃんの方がええやんか・・・
つて、そんなんでいでもええ。何か用か？」

「用も何も。」

白夜は居住まいを正し、向かい合うちょび髭に真剣な顔を突きつけた。

「三千世界つてナニ？俺が核爆弾的存在で、抹殺されるかもしれな
いつて一体どういうこと？」

「あー、今頃自覚したわけだ。」

アフロが頭の回転が鈍いヤツ、とでも言いたげに嫌味っぽく笑う。

「アンタ本当に天使なんだ？」

「うーん。昨日も言ったけどそいつはちょいつと違うかもしれへん。
まあ、違つてないとも言えるが。」

「ドッチだよ。」

「せやなあ」とアフロが赤いマニキュワが艶かしい指でちょび髭を
撫でる。

「ここでは天使ちゅわれとるが、ワイ等の自覚じゃ単に仕事しとる
だけやもんな。その仕事がここでは単純に天使の所業だの神の御遣
いちゅわれてて、せやから誤解とも言い切れへんわけやけど。」

「頭の回転が悪くて申し訳ないですがもう少し分かりやすい説明を
プリーズ。」

「ワイは絶対神ちゅー此処とは別空間の存在や。異空間は、ここや
絶対神を含めて、絶対神が把握しよるだけで三千ある。それが三千

世界ちゅーもんや。把握しちよるつつても、外側からその存在を確認しよるだけの空間もあつて絶対神が全て干涉しちよるわけやないで。オマエさん等が見る何億光年も先にある星のようなもんやな。ツキとか仮性とか、探索が入った星もあるけど、確認してあるだけちゅー星も一杯あるやろ？」

「今、漢字の変換間違つたよな？」

「三千世界は微妙なバランスで保たれてんのやけど、これが結構不安定でな。バランスが崩れると空間に歪みが出るんや。異世界と繋がっちゃうたり、ブラックホールとかホワイトホールちゅー歪みの穴みたいな空間に繋がったり、ま、あんまりエエことあらへんな。」

「へー。SFとか全くの空想かと思つてたけどひょっとしてその中にはそういった空間に遭遇した時の実経験を元に書かれてるのもあったりして？」

「かもしれへんな。ま、ここよりも絶対神のほうが歪みが大きいんやけどな。絶対神はなんや変動空間の中心地にあるらしくて、別空間に生じた歪みの影響なんかも諸に食うんや。で、歪みプレート・この世界の喩えで言うたら地震の地殻プレート？がこの空間の特にまたこのクニや。」

「ただでさえ地震大国なのに三千世界のプレートまで背負い込んで大変だねー。」

地震大国日本のさらには大型地震が絶対来ると子守唄のように聞かされ続けた場所に生まれついた白夜はどこか諦観気味に頷いた。

「で、アンタ等がその歪みを管理しているわけだ？」

「せや。此処と違って、変動空間の真っ只中にある絶対神は当たり前のように空間の歪みに気付いておつて、そのための対策も日夜更新中やからな。異空間トラベルも一昔よりずっと安全で簡単になつたわな。」

「何か、此処で言う海外旅行みたい。ね、どーやって移動すんの？ UFOみたいな円盤型の船とか？すごい機械があるんだろうね。」

「カウンター行ってトラベラーズチェックを受けて、テレポートボックスつちゅう個室の椅子に座って横にある機械に行き先がインプットされとるカードをスラッシュするだけや。」

「・・・何か味気ない・・・」

「テレポートボックスつちゅうんが最高峰の頭脳を集結して編み出した最新鋭の発明なんやで。空間の歪みを凝縮して、不安定感を抑制してるんや。そのお陰で今では目的地に当たり前のように繋がるようになったんやけど、それまでは目的地と違う空間に飛ばされたりしてアブナイつちゅうねん。」

「大変だったんだね。ところで歪みを凝縮して抑制するってどうやって？」

「・・・」

「まさか知らないの？」

「オマエだつて飛行機の仕組み分かつとんのかいッ！ええッ？造れ言われてオマエは造れんのかいなッ！」

白眼視に天使はちよび髭を震わせて食って掛かる。

「世の中って意外と不思議だらけなんだね。俺もすっかり過去に行った時に過去人に説明を求められてもいいように携帯電話の仕組みの一つでも覚えておくかな。」

ありえない状況を想定して白夜は真剣に思い悩む。

その耳に風に乗って予鈴の音が届いた。

見渡せば、校庭や校舎内をうろついていた生徒がボチボチと教室に戻っていくところで、白夜は慌てた。

「エエッ！ちよつと待ってよ。肝心の話がまだなのにな！」

天子もいつの間にか顔を戻し、屋上から立ち去ろうとしている。

「わーっ、待って待って。俺が抹殺されちゃうかも？の話はッ？何か回避手段はあるんだよね？その辺りをとりあえず教えといてくれないと夜も眠れないんだけどッ」

「あゝその話も一口にゃあ語れないなあ。せやけどワイー応教師やし、その説明するために授業サボるわけにはあかんやん？」

「よく言う！初っ端に俺のクラスの授業ボイコットしたくせに。」
非難しつつ、白夜はあれ？と眉頭を跳ね上げる。

「そーいえば、黒井音子がどうかした？・・・そーいえば・・・ひ
よつとしてさつき屋上から覗いてたのって黒井音子の事？」

女子更衣室から三つほど隣。中校舎第二の一番隅に美術室があり、
美術部員の音子は昼休みは必ずそこにいる、らしい。

直接見たわけでも（見たいわけでもないけれど）、美術部員の一部
はオタクと呼ばれる集団で、美術室はオタク魔窟と呼ばれオタクの
憩いの場となっている。

噂によると音子もその魔窟住人らしいのだ。

「せや。それも一口にや語れへんが、アイツには気いつけてな。ま
あ時間がないからそれもまたの機会にいーや。」

「気をつけろってどー言うコトツ？ちよつとまたの機会っていつだ
よお！」

階段を降り三階フロアに辿り着く。

白夜はここから渡り廊下を使って北校舎へ向かう。天子は更に一階
下の職員室に行くつもりなのだろう。

階段を降りようとする天子の腕を掴んで白夜は心中の不安を切実に
訴えた。

「しゃーない。今夜家に行って全部説明したるわ。ごつつ長いで覚
悟せえや。」

「えー今夜って何時ヨ？」

「せやなあ。オマエさんが一番のボ－ナスゲッターかて他の奴等な
いがしろにするわけにもアカンし。ま、何事もないとは思っけど一
応見回りせなアカンから。零時くらい？」

「ムリ。俺、夜更かし出来ない体質なんだよね。」

「さつき眠れん言ったんはどの口や。」

天子は呆れて眉を顰める。

「それに昨日、修羅場って母さんの機嫌悪いんだよー。妙な家に
上げたのバレたら俺が家追い出されんじゃん。」

「むう。天使に向かって妙とは失礼な。・・・ま、ワイも正体バラして廻るわけにもアカンし、上手く忍びこんだるから安心せい。」

「何でだろうなあ・・・すごく心配だ。」

「ワシをなんだと思うとる。天使やで？そんな晩飯後や。」

「今、素で間違えたよな？」

カツカツとヒールを打ち鳴らして階段を下りていく天子に

「絶対だよ。なるべく早く来てよ」

と何度も念押しして、白夜もまた北校舎へ向けて歩き出した。

その途端、

「見いつちゃった。見いちゃった。」

小学生のお囃子のような掛け声と共に背中に衝撃が加わり、白夜は前にのめる。

見れば、クラスメートの男子二人だ。

「あれ。何やってるの二人とも。」

「御用聞き。んで、ここまで来たらエンジェルセンセの声がしたからさ。」

「なにそのエンジェルセンセって。」

「天子の読み方変えてテンシ。だからエンジェル。どうだ天子センセにピッタリだ。」

事実間違っちゃいないが、過去に流行ったチェーンメールの従姉妹のような名前だと思う。

左右から二人にド突かれて白夜は「あたっ」と悲鳴を洩らす。

「憎いぜ。この色ボケ隊士がつ。今学校中の一押し注目株のマドンナをもう物にしたってか？」

「ハア？」

「今夜もお盛んですなー。そのうちオマエ睡眠不足か暗殺で身を滅ぼすよ？」

彼等の崇め奉るマドンナとはあのちょび髭似非天使の事で、多分話のところどころを聞いていた彼等は、ナイスバディーの新任教师が今夜白夜の家に忍び込む約束を交わしていたのだと思い込んでいる

のだ。

「ちよ、待つ誤解ッ・・・」

「健全な男子高校生にとつて、ムチムチ美人教師とどーこーなるうなんざAV限定の世界なんだよッ。それを現実にやつてのけるなんざお前はケダモノだ。エロ魔獣めッ」

「『センセイが手取り足取り××取り、色々教えてあ・げ・る』なあんて迫られるわけだ。」

「あのスイカのような胸を心ゆくまで揉みしだくというのは、貴様はッ！」

「『いやん』白夜クンの××つて××××ね。私、もう××××が××××よ。』なあんて言わせるわけだ。」

「イヤラシイのはお前等だッ！」

まるでその手の経験に縁遠い白夜は顔を真っ赤にして抗議する。

だがまるで聞いていない二人は白夜を指差し「エロ」と断言する。

「下着の色は黒レース。うむ。赤とかも興奮するな。ガーターベルトは必須アイテム。」

「ボンテージとかヒールとかもありでしょ。お手軽にマジックテープもありけどやっぱり縄のほうが用途広いんだよな。」

「かーッ。俺、年上バージンなんだよなあ。たまにはうつせえジャリ女じゃなくて、リードされて身も心も食い尽くされたいねッ。」

「あーいいよな。奪われるってシチュエーションも。鼻っ柱の強そうな年上女を調教って定番のノリだし？」

「う・・・なに、何の話をしてるの二人とも・・・」

浅瀬で貝拾いを楽しむ程度の水泳初心者がいきなり海溝に沈められた気分だ。レベルが違いすぎてもはや足掻く気にもなれない。

北校舎に辿り着いたところで特別教室へ移動中の生徒と擦れ違いになった。

その五人ほどの女子の集団に桃瀬の姿を見つけて、白夜はヒイツと青褪める。

赤裸々発言を連発する二人の声は大きく、多分、いや確実に彼女た

ちの耳に届いていることだろう。

桃瀬の白夜を見る瞳が冷たい。

それどころか・・・

「白夜君、サイテイ。」

擦れ違い座間ボソツと落ちた呟きに白夜はフリーズした。

その頭の中を桃瀬の声がリピートする。

サイテイサイテイサイテイエロ魔獣の色情魔。童貞のくせにケツ――

「うわああん。」

いても立つてもいられず走り出した白夜を見て、友人二名は

「今夜のことを思っで興奮してやがる。畜生め。」

と嫉妬混じりの揶揄を飛ばした。

第一話の五

踏んだりけつたりの日だった。

「はあもうお先真つ暗。」

白夜は自室のベッドの上で枕を相手に溜息を零した。

この間崩壊し再建されたばかりの部屋はとても綺麗で、気分がちよつとだけ浮上する。今夜の夕食のハンバーグも美味くて、デミグラスソースが傷ついた心をジーンワリ癒してくれたし。これから胡散臭い天使を招いて人生の危機を脱出する術を得れば・・・、

なんだ、憂いはまるでなし！

桃瀬のことはトラウマボックスに仕舞いこみ、気持ちを浮上させた白夜は気分よくベッドに転がった。

憂いを一掃した途端急に眠気が襲ってきた。天使のこともうっかり桃瀬と一緒にトラウマボックスに閉じ込めてしまったのか、すっかり忘れた。

だが、直ぐに耳障りな音に起こされた。

窓ガラスがガツガツと鳴っている。

想像するに石か何かだろうが、用途に対して些か大きめなようだ。

ガラスが割られる前に、と慌てて窓に駆けつけ外に顔を出す。

東郷家は典型的な二階建ての一軒屋で、洗濯物を干すスペースと無理矢理広げたガーデンが混在するこぢんまりとした庭がある。白夜の部屋は二階だ。

今夜は満月で外は煌々と明るい。

白夜は洗濯物を取り込んだ物干し台の根元にゴム風船のような丸々太った白い猫を見つけて、顔を顰めた。

「なーひよつとしてオマエ天ちゃん？」

「せや。」

他の家族に気取られないように声を潜めて話しかけると猫はぼよ

んつという幻の効果音を奏でながら顔だけちよび髭に戻した。

「うう・・・人面猫。」

「仕方ないやんかあ。この姿なら万一見られたとしてもただの猫や。・・・ところでその天ちゃんってなんや。」

「天使だし天子だから天ちゃん。」

「大体、天使っちゅうんは役職名やでえ。」

「ま、いいじゃん。それより家族に見つかる前に早く上がって。・・・って上がれんの？」

素朴な疑問に、ちよび髭はむつと口を尖らせる。

「猫に身を竄しているとはいえ、ワシは天使やで！こんなところ軽やかに上ってやるわい。」

それを証明するように猫は見た目の重さを物ともせず高らかに跳躍した。

トンと塀の上でステップを踏んでモミの木の枝へジャンプ――

――した途端、重量に耐え切れなかった枝ごとバキバキバキッと物凄い音を上げて地面に落ちた。

「ゲエツ！毎年この木に飾りつけて生木ツリーでクリスマスするのにつ！」

「・・・外国じゃあ、棺桶の材木だから縁起が悪いってんで庭にはよう植えんわ・・・ってか、イタイ・・・」

不審な破壊音は就寝中の家族の耳にも届いたらしく、家内に灯りが灯る。

「わー家族が起きた。天ちゃんが無駄な見栄なんて張るからっ！」

「この人でなし。こういう場合はまず負傷者の心配やで・・・」

白夜は無関係を装いそつと棧の陰に隠れて行く先をうかがう。

非難っぽくばやいていた天使はリビングの人の気配に口を噤んだ。

顔も猫に戻している。とはいえ満面に毛が生えているかちよび髭かの微々たる違いだが。

庭先に恐る恐る現れたのはまずゴルフバッドを持った父。そしてその背後に母。そして

「ねこおおお」――「オッ！」

前歯のないマヌケな顔で絶叫を轟かせる妹（6歳）だ。

「あゝ……. よりもよって一番厄介なものに見つかっちゃって…….

」
猫が妹にまんまと捕獲されている様子に白夜は万事休すと溜息を零す。

「あらまあホント。猫だわ。」

母親が、逃げようともがいて妹の腕に逆さにホールドされている猫を覗き込み目を丸くする。

「うーん。どうやらこの木から落ちたみたいだね。」

父親が無残に枝を居られたモミの木を見上げて納得した風情で呟く。その間も猫は細腕から逃れようと必死に足掻いていたが、頑丈な拘束が緩むことはない。その上、耳やら尻尾やら髭やらところ構わず引つ張られ撫で回され反抗心すら尽きかけようとしていた。

バツタやら、トカゲやら力ニやら、一体彼女の手によっていくつのイタイケな魂がお星様になったことだろう。

現在庭で咲いている花はそんな彼等の亡骸を糧に咲き誇っている。

白夜は、ぐったり伸びきった白い毛玉がさすがに憐れになり、慌てて階段を駆け下りると妹から猫を奪還した。

「ごめん母さん。これ俺の。時々餌あげてたら懐かれちゃって。」
状況を理解した母親は途端に顔を顰めた。

「んもう、お兄ちゃんったら人間に飽き足らず猫にまで手を出しているの？アナタは猫じゃないんだから盛ったらその代償がついてくる事をちゃんと自覚しなさいね。全く誰に似たのかしら！」

「う……. 母さんこの間の喧嘩の仲裁のコトまだ根に持ってるね……. ？」

アレは喧嘩じゃなくて乱闘だ！と息巻く母を父が宥める。

妹はその横で「カルチン、カルチン」と囁し立てる。軽いチ。コとは尻軽の同意義語だろうが意味は分かっているのか。オマエこそ誰に似たんだといってやりたい。

「ねこほしーっねこかいたあああーい！」

妹に尻尾を引っ張られた猫が「ふんぎい！」と妙な悲鳴を上げ、白夜は慌てて猫を頭上に掲げたが、あまりの重さに腕がブルブルする。「うーん。お兄ちゃんそれ野良？野良ならウチで飼ってもいいわね。」

「エエッ！」

ズドンと音がして、拘束の緩んだ腕から猫が落ちて地面にめり込む。「いたい・・・」

小さく漏れた呟きに白夜は慌てて猫を拾い上げ、撫でる仕草で口を塞ぐ。

「だってどうせアナタが餌をあげてるんでしょ？・・・それにこんなに可愛いんですもの。」

「ああ。本当に可愛いな。こんな可愛い猫は今まで見たことがない。」

同意する父もだらしなく顔を緩ませている。

目は確かか二人とも。

コレはちよび髭が天子の姿で学校を魅了したのと同じ魔力だと白夜は思うことにした。さもなくば十七年培ってきた美意識と倫理観が壊れる。

「・・・ま、まあ、そういうことならコレ部屋に持つてくよ。」

「ずっるーうい！アタシ、アタシッ！」

「駄目。今日は俺。・・・用が済んだらオマエの好きにしていいいから。」

白夜は猫の非難めいた視線から目を反らして嘯く。

「用ってアナタ・・・くれぐれも動物愛護団体から抗議されるような事はしないで頂戴ね。」

「まあまあ。白夜クンも若いんだし・・・」

「父さん母さん、もう少し息子を信用してクダサイ。」

不審げな母と、それを又ルク間違った方向から宥める父に駄目だしして、白夜は自室に戻った。背後では「ジューカンジューカン」と

妹の叫ぶ声が続けていた。

部屋に戻った白夜は理不尽な言いがかりに憤りつつも、育ちが良いのでそつと猫を床に置いてやった。

猫は早速顔だけをちよび髭に戻し、やれやれといわんばかりに伸びる。

「なあ、オマエの両親は所謂サイコンっちゅうやつか？」

「ああ、うん。妹は二人の子だから俺とは異父兄妹ってやつね。・
・って疑問系？天使って人間の生い立ちとか寿命とか全部分かってんんじゃないの？」

「SFの見すぎ」。ん、まあ過去は調べようと思えば簡単に調べられる。未来はまあ推測やけどかなり精巧やで。けど、それかて絶対神の科学の随意を集結して造られたリングあつてのことや。あのリングは優れもんやでえ。絶対神との通信機能は勿論、絶対神で流れとるニュースや歌まで聴けちゃうんやからなつ。」

「単純に携帯電話？・・・それはそうと天使自体は万能ってわけじゃないんだね。ホラ、よく言う創造主とか全知全能の神とかの、お遣い？とすると、絶対神って俺等が思ってるような天国じゃないんだ？」

「せや。ま、ニンゲンよかちいつと文明は発達しよるが、オマエさん等が言う天使だとか天国っちゅうんはニンゲンの勝手な想像やな。」
言い差して、ちらつと白夜をみやる。

「・・・なんや、ほんまの親に会いたかったんか？」

白夜はちよつと目を見開き、慌てて手を振った。

「あ。別に今の家庭に不満があるとかじゃないし、父さんも大好きだし？・・・ただ、本当の父さんって俺が物心つく前に死んじゃったからさあ、もし絶対神が天国でそこに父さんがいるなら一回くらい話してみてもいいかな、なんてちよつと思っただけ。」

——アナタの父親は菩薩のようなヒトだったわ。

それが、父を知らない白夜に母親が語った言葉だ。

その当時の母は今からは想像も出来ないほど刹那的で排他的で、とにかくもう喩えようのないくらいに荒れ様だったらしい。

道で偶然出会った父に『だったらアンタが拾ってくれるのかッ？』

と売り言葉を投げつけたところ、二つ返事でお買い上げ、結婚して白夜が産まれた。

なんてボランティア精神に溢れた男か。

そのくせ生活能力に乏しく生涯フリーターだかプー太郎だかで、殆ど母の稼ぎだったようだ。

そんなチャランポランでありながら、菩薩のようなヒトと言わしめる不思議な男を是非見てみたいと思うのも当然といえば当然。実子であれば尚更の興味であろう。

「さよけ。ワシらが把握しとらんどこそその空間にはそないなところがあるかもしれんなあ。」

猫はそっけなく言って、白夜の腰を下ろしているベッドに飛び乗った。

ぶつきらばうな慰めにほんわか心を温かくした白夜は、斜めに傾いたベッドに眉を顰める。

猫が重すぎてベッドは巨大アリジゴクのようにすり鉢上になったまま戻らない。

非難めいた視線を送るも猫に退く気配はなく、白夜が仕方なしにベッドの下へ座りなおす。

「さあて、絶対神の話はどこまでしたかいな。」

「とりあえずさあ、核爆弾的存在の俺はどうしたら脅かされずに人生を真つ当に過ごせるか教えてよ。大体、ボーナスゲッターってナニ？」

「よしよし覚悟して聞けや。大体ポイントゲッターっちゅうんはな

——」

そう言って猫はシャハラザートのように恭しく語りだした。

第一話の六

「絶対アラビアンナイトって嘘。昼間公務こなして帰ってエッチしてその後朝まで物語聞いて・・・って、何時寝てるんだよ？お前こそ魔人だろって、その王様。」

一時間目の古典の授業中、白夜は睡魔と激戦を繰り広げていた。瞼が重い。というか溶ける。チーズのように蕩けてピザの上でトロリ・・・——って、それ夢やんけ！

気がつくと書いた覚えのない異世界文字がノートにのたくっていたり、体が49度ほど傾いていたり。

天使の話は明け方まで続いた。そのお陰で三千世界のあらましは頻りに把握出来た。勿論、自分の存在についてもだ。

ちよび髭天使は三千世界の中の絶対神という空間の存在で、空間に歪みが生じると絶対神が諸にその影響を受け、三千世界全てに混乱をきたすのでそれを防ぐために創設された三千世界の空間歪み管理職の人員なのだ。所謂公務員、なのだが試験レベルが高く、コチラの世界でいう医者や弁護士、政治家といったレベルのエリート的立場らしい。

この世界が最重要監視区域なのは、この世界の揺れが一番大きいからだ。

異世界には色々あって、その中には当然ヒトガタでない存在もあって、揺れの原因は様々らしいが、この場合はニンゲンの禍福が要因になる。禍福とは幸不幸。

当人にとって不幸など全て払拭したい無用の長物だが、禍福は表裏一体。悪を含んだ上で安定が保たれているわけだから、悪を完全に取り除くとすべからず安定が崩れる。

空間にも不可視の自己防御能力があって、世界が不幸に傾きかえると幸に、幸に傾きかけると不幸にと抑制するがその推移は極めて遅

く、修復がなされる間絶対神への影響が大きいため人為的に禍福が制御される。

ニンゲンの禍福は周囲の状況や個人の気分によって±2、3のころをバイオリズムのように上下していて、事によっては稀に4、5くらいにいくこともある。

常人ならば1レベルの幸せでゲージポイントが1増加するところを、白夜の場合3、4ポイントで増加する。

こういう異常体質は稀にいて、天使達はボーナスゲッターと呼ぶ。毎日がポイント二倍デーのオメデタイ雰囲気だが、振れ幅がデカイというだけで管理する側にとっては厄介極まりない。

尤もそのレベルならば干渉対象外だが白夜の場合、楽観的な性格が災いして常にゲージはプラス1、2辺り。つまりちよつとしたイイコトで常人の最高ゲージを簡単に凌駕する。とてもとてもイイコトに遭遇した日には常人では珍しい5以上を簡単に弾き出すと予測され、これは即監視対象レッドラベルとなる。

その状態で制御不可能と認定されれば、抹殺は確実だ。

本来天使は空間がマイナスに傾きかけた時に、人々に幸福を齎しプラスに戻すのが役目だ。それとは対象に人々に不幸を齎すのは小悪魔の役目である。

面白い事に悪魔の認識がコチラの世界と絶対神とでは微妙に異なる。悪魔は必要悪とはいえ殺生与奪を任されているため、天使よりも格が高い。

悪魔職は最低でもジェネラリィーエンジェルから昇格した後の役職でなければ試験すら受けられないという。

それ故、悪魔は天使よりも人員が圧倒的に少ない。

それ故、悪魔の仕事は些か粗い、というか乱暴だ。

例えば、マイナス10に傾いたゲージをゼロに戻すために天使は1レベルの幸せを十人に与えるが、悪魔はプラス10のゲージを戻すために5レベル前後の不幸を2、3人とか、最悪10レベルの不幸をどーんと一人に与えてしまうのだ。

そもそもがそういった荒業師ばかりなので、ポイントゲッターなど見つければ上官への報告と共に抹殺許可を貰うに決まっている。

中には、他所で禍福ゲージが大きく傾いたときの防御手段として監視対象下で保護されるポイントゲッターもいるが、管理しやすいように常時感情の起伏が乏しい奴が選ばれるのが通例だ。ちよつとしたことで浮かれる白夜など論外。

不幸を与えることはそもそも天使の役目ではないが、抹殺といえは不幸の際骨頂なのでそれを回避するのは天使の役目だろう、とちよび髭天使は屁理屈ともいえない理由を掲げて白夜に禍を齎してきた。・・・というのは建前で、任期の間、よりポイントの高いニンゲンを制御すれば、内申が上がるらしいのだ。

未知の存在と戦う以上味方は多いに越したことはないので、その辺りの本音についてあえて言うまい。

『デートにこぎつけただけで禍福ゲージが軽く+5・6に跳ね上がるんやで。これで女コマした日にやどーなることやら・・・』

『まさか性欲花盛りの青少年に実も花もなく立ち枯れるとかッ?』

『ほんじゃ事の直後に直下型大不幸を落としてやるか?』

『イヤダッ!』

『もゝアレも嫌コレも嫌で、聞き分けない餓鬼みたいな事言わんといてな。』

天使は煩わしそうに言うが、仕方ないと納得するにはデカイ選択だ。ポイントゲッターなんて俺の所為じゃないのに。せめて後ろ向きな性格ならば良かったが、楽天的なものも生来のものなのでもはやいかんともしがたい。

『あ、でもさ、俺昔すごい大事故に見舞われたことあるよ?それも天使だか悪魔の仕業なのかな?』

やや人事的なのは、白夜自身はその事故についてまったく記憶していないからだ。事故の後遺症だと言われているが、未だに綺麗さっぱり抜け落ちて断片すら思い浮かばない。

『さてな。ワイの任期前の話はよう知らん。せやけどもしそうなら

既にポイントゲッターとして登録されとるはずなんやけどなあ。ま、ちいつと気になる事もあるで調べとくわ。」

『気になることって……?』

天使はまたハッキリしたら話すと言って、白夜もそれ以上深く突っ込まなかった。ともかくその時は眠かったのだ。

眠い。

堪えきれず欠伸を零した白夜に周囲から棘のある揶揄が囁かれる。

「おやおや。帝王は今日も寝不足らしい。」

「やっぱり寝不足の破滅が先かな?」

いやいや、殺気も相当なものですよ。

周囲の不穏な圧迫感に突っ込みながら白夜は続けて出そうになった欠伸を辛うじて飲み込む。

今朝のホームルームに現れた天子も明らかに寝不足と分かる虚ろな顔で、二人の関係は否応なく妄想された。

しかも迷惑千万な天使はクラス内の殺気濃度を顧みず、

『明け方が一番激しかったわ……』

などと呟くものだから、空気はさらに悪化した。

確かに、徹夜は同じでも、年寄り並みの早起きで部屋に襲撃した妹に弄り捲くられた天使のほうがグロッキーだろう。

針の寧ろに晒されながら白夜はあることを思い出し視線を廊下側の後方へ向けた。

黒井音子は今日もカリカリと雑音を上げて周囲の不安を無造作に煽り立てている。昨晩はポイントゲッターの話で時間が尽きて黒井音子の事をすっかり聞き逃した。

気をつけるとは一体どういう意味なのか。

「おい、東郷。……黒井がどうかしたのか?」

教壇から古典のまだ若い男教師におそるおそる尋ねられ、白夜は飛び上がった。驚いた。

黒井音子に迂闊に触れんじゃねえよッ、新米教師めがッ！

白夜は呪われたらどうしてくれるんだと内心本気で激昂し、即効で否定する。

「い、えっ、滅相もありませ・・・」

それを遮るように教室のどこから妙な思いつきが迸る。

「あ、ひよっとして白夜のモデル原因って、黒井音子の魔術によるものかつ!？」

そんなアホな・・・。

内心で突っ込むのは白夜だけでクラスメートは何の根拠かその戯言を鵜呑みにして、恋愛成就を黒井音子に迫る。
が、

ニタリ

口だけの不気味な笑みに迎撃され、机ごと非難した。

殺気からまんじりとしないうちに不安へと空気の色を変えた教室で白夜は、早いうちに黒井音子のことを聞いておこう、と思う。

猫を妹に受け渡すのはもう少し後になりそうだ。

不信感を増した母の顔と間違った慈愛を滲ませる父の顔がまざまざと目に浮かんだ。

第一話 の七

昼休みの突入と同時に天子は誰もいない科別職員室で悠々と調べ物に勤しんだ。

この殻はとても役に立つ。

「一人で静かに勉強したいんですがあゝ」とシナを作って訴えたらば、男性ばかりの社会科教師は鼻の下をだらしなく伸ばして退出してくれた。

誰もいなくなつた科別で、天子は徐に金のワツカを取り出した。頭に載せて「起動」、その後には幾つかのキーワードを続けて「検索」する。

天子の眼前、丁度一メートルほどのところに不可視のスクリーンでも出来たように文字が現れていく。

それを目で追いながら天子は不可解な唸り声を洩らした。

調べているのは白夜の言つた過去の事故だ。

大型トラックが作業中のクレーンを薙ぎ倒し、そのアームでマンションが崩壊、火災まで出ている。白夜はクレーンに接触する前的大型ダンプに引つ掛けられ意識不明の大重態に見舞われたが、幸いにもそれほど大掛かりな事故に拘らず死者は一人も出なかつたようだ。合計30レベルを軽くいくはずの禍でただの一人も。

絶対神の者が関わつた事件なら報告書として事細かに経緯が記載されるものだが、記録は端然としていてあくまでも自然災害の事例扱いだ。

「きな臭い。絶対神の匂いがプンプンすんやけどなあ・・・」

天子は検索範囲を広めて、ぼやく。

その事故が起きる以前、その辺りは巨大な躁気圧に覆われ禍福ゲージが軒並みプラスを示す日々が続いている。

個々がそれほど高いポイントでなくとも、それが何万分、毎日続くとなるとその周囲ではかなり幸福濃度が高まる。些細な禍ごときで

は「気にしない。気にならない。」状態で、加速的にプラスへ傾いていく躁スパイラル現象が起こる。

資料を見る限りその躁状態が人為的なものなのか自然発生的なものなのか判別しがたいが、それを禍福ゲージ^①ゼロに戻すために絶対神が介入したと考えられなくはない。

そうだとしてもそれを隠そうとする意図はなんなのか。

授業の予鈴に天子はワツカを仕舞い科別を出た。

物思いに耽りながら渡り廊下まで来てギクツと足を止める。

日が燦然と降り込む渡り廊下とは対象に壁に阻まれた建物の中はうつそりと暗い。

その陰りの中に黒井音子が溶け込むようにして立っていた。

教室内ではまるで動かない唇が端然と言葉を紡ぐ。

「守護神が個人に情をかけるのは越権行為だ。オマエの内申にも響くと思うが？」

その言葉に天子はやっぱりか、と顔を強張らせる。だが、このままだやられっぱなしも癪に障る。

「せやかて、なんの罪もないニンゲンをワシ等の都合で抹消するなんてあんまりや思わんか？アイツみとると気の毒でかなわんわ。」
気丈にも食って掛かってきた天子に黒井音子は口元を歪めた。

「情が移ったか。」

見る者を震撼させるような邪悪な笑みに天子も思わずたじろぐ。

「罪はない、・・・が、抹消も管理も絶対神ばかりの都合ではない。大きな力を野放しにすれば絶対神どころか三千世界が破滅の危機に晒される。それをオマエは知らないわけではあるまいよ。」

ぐるぐると喉で奇妙な音を奏でながら、黒井音子は長い髪をそよと揺らして踵を返した。

「ジェネラリーーエンジェルごとき下っ端が私の邪魔をしようなどと思ひ上がるな。」

鬱陶しい前髪の隙間に覗いた瞳は燃え立つような紅蓮。

その視線で容赦なくトドメを刺して黒井音子は廊下を遠ざかってい

った。

姿が見えなくなつて天子は「どひゃー」と詰めていた息を一気に吐き出す。

「くそう。小娘の分際でなんやあの威圧感ハッ！しかも偉そうにッ！ワイが抹消されるかと思つたわっ！」

ヒールをガツガツと鳴らし、負け犬の遠吠えを轟かせる。その時ピッピロリ♪と、マヌケな着信音が割り込んだ。

「なんや、こないな時に絶対神から・・・アカン。問題勃発や。」
ぶつくさ言いながら連絡を受け取った天子は表情を変えた。

コレを上手く処理せんことには来期の昇格も夢のまた夢。

天子は白夜のことをすっかり忘却ボックスに放り込み、目先の大事に駆け出した。

第一話の八

「いやぁ平穩つていいね。」

それから数日、白夜はとても平和に幸せな日々を過ごした。

あの日以来ちよび髭アフロは白夜の視界から姿を消した。

抹消を回避してくれる天使といえども実際には不幸を齎す張本人で、姿が見えないと心なしか心が軽く気分も晴れやかだ。

だが現実的には白夜の禍福ゲージは平均時でプラス2をキープし、ちよつとしたことで4・5を弾き出すので状況的にはかなり危険なのだが、本人にまるで自覚はない。

尤も今回に限っては白夜のプラスポイントを相殺するマイナスポイントがあつて、

「ちえっ、ナニが平穩なもんか。あゝエンジェルセンセカムバックウ。」

新任教師は就任早々、

「血縁のご不幸で」と休暇をとっている。

個々には微々たるマイナスポイントだが、学校中が暗澹としているので白夜の陽気に匹敵するのだ。

中には心労のあまりか、欠席する者まで出てきて学校中のマイナスゲージはいつになく高い。

しかしそれもほんの数時間前の話。

「オマエ一人幸せそうな顔で何処に行くんだヨ？」

昼休みに突入して、颯爽と立ち上がった白夜にクラスメートの一人が八つ当たり気味の棘を含ませて訪ねる。

「えゝへへへ。実は桃瀬とこれから一緒にランチしよって約束なんだ。」

実は桃瀬と仲直り出来たのだ。

切実に誤解だと説得した結果

「そうよね。白夜君はそんな人じゃないものね」

と、白夜のナニを信じてか桃瀬は納得してくれた。

「ナニッ！あの桃瀬とかッ！」

「つか、変わり身早ッ！いらっしやらないとはいえエンジェル先生はどうしたッ？」

「関係ないねえ。あーご不幸の席でいい人に巡り合ってそのまま結婚、月にでもハネムーンに旅立っちゃってくれればいいのにねー。つでにハネムーンベイビー製造で二年ほど育児休暇とらないかなー。」

「心底楽しそうに言うなッ！」

怒って飛び掛ってきたクラスメートをひょいっとかわして白夜はスキップで廊下を遠ざかった。

白夜の禍福ゲージ+5。かなり危険な状態だが本人にまるで自覚なし。

しかし平和も束の間。

白夜は階段を降りきったところで思いっきり顔を顰める。

「げえ・・・」

「なんやえらい挨拶やんけ。」

唐突に現れ出でた天使は口を尖らす。

人目を気にした二人は示し合わせたように階段下のダンボールの陰に隠れる。

「ところで天ちゃん最近ナニしてた？あ、社交辞令だから応えたくなければ別にいいけど。」

「オマエはホンットお気楽やな。オマエさんのことが心配やからこうして忙しい合間を縫って確認しにきてやったのに。」

「だから今日は元の姿のままなんだ？」

学校だというのに天使は『天子』の姿ではなく、黒い細身のスーツからふくよかな腹を突き出したちよび髭アフロヘアの井出達だ。

「そんなこと言つとる場合やないで。ワイの担当地域でちよいつと問題が発生してな。」

「問題？」

「せや。歪みが生じて異世界の空間と繋がりよつた。——あ、ワイの管理能力とは何の関係もあらへんで。自然発生型や自然発生。穴は既に塞いだるが、そこから異空間の奴が紛れ込んだの、天使悪魔問わず界限の絶対神総出で一掃中や。」

「ふーん。大変ダネ。」

「なんや臨場感もへつたくれもない。ってか、やけにうわついたらんか？」

パチンと指を弾いた天使は途端に「ギエツ」と叫んだ。

「+5・て・・・！一体何してけつかる。うわゝこりや早々に目えつけられよるで・・・って話の途中でどこ行くねん！」

「天ちゃんは心配性なんだよ。俺のことなら大丈夫。今から桃瀬とランチなんだゝ。待たせちや悪いから行くよ。」

じゃあねゝと見るからに浮ついた足取りの白夜を天使は呆れて見送る。

「その不法侵入者の獲物はオマエやでゝ・・・って肝心のところ聞き逃しとるがな。」

ま、なんとかなるだろ、と天使は身を翻し、校内に忍び寄ってきたという情報の侵入者の搜索に乗り出した。

第一話 の九

昼休みに入り、黒井音子はご他聞に漏れず美術室への道のりを進んでいた。

準備室など日を望まない部屋が多い中校舎の二階廊下は日中でもうつそりと陰りを帯びている。

理科準備室の扉の前まで来て黒井音子は足を止めた。

不意に人気のない廊下の隅に白い靄が立ち込めた。

靄はユラユラと微動しながら形を変え、人の輪郭を露にする。それが明らかな人の形をとっても半透明なままで背景が透け見えた。

「臨時出勤要請です。」

男は清潔な短髪に僧侶のようなストイックな法衣を纏っている。温和そうな性格と聡明さが混同した面差し。切れ長な瞳は慈愛に満ちていてクールな雰囲気を払拭している。

「随分てこずっているようだ、・・・ですが。」

「何分増殖が激しいですからね。子株のほうは他に任せて貴女には親株を刈ってもらいましょう。」

男は金の輪を胸の正面に平行に浮かべ、どこから取り出した筒をその輪の中心に入れた。

同時に音子の胸元正面に同じような穴が開き、そこからぬっと銀の筒が現れた。

音子がそれを手に取ると穴は静かに閉じた。

筒は二？ペットボトル大。

絶対神の文字で幾つかのラベルが貼られている。

『取扱注意』『変措厳禁』『甘さ控えめ』『凝縮原液百%』

「凶源には原液で約一？。感染者には百？に対してカップ一杯、これは非感染者の予防にも効果があります。好きに使ってください。」
音子は手中の筒に視線を落とす。

「今は・・・動けない。」

「何故です？」

いつになく切実な雰囲気になって男も真摯に尋ねる。

「×切が迫っているから。」

「仕事をしてください。というか、しろ。」

音子はチツと小さく舌打ちする。

「ではご健勝を」といつて男が消えるた。

その後を見詰めて音子はボソツと呟く。

「登場の場所はもう少し考えて欲しいものだな。」

男の消えた後には、理科室の主、人体模型のマルオくんがいつもと同じ無表情で佇んでいた。

第一話の十

ルンルンと鼻歌を歌いながら白夜は中庭に出た。

季節は初夏。天気もいいので外で食べようと約束していた。

四時間目の授業が移動教室の桃瀬とは直接中庭で待ち合わせだ。

「ん？」

外に出た白夜は鼻歌を止めてグランドのほうを見た。

渡り廊下の向こうに小さな箱庭があり、その先に欒並木に囲まれるようにしてグラウンドがある。そこを白い綿毛のようなものが風にのって通り過ぎたような気がしたのだ。

綿毛は拳大でタンポポの綿毛にしては些かデカかったような。

ひよっとして天使だろうか、と猫の姿を思い出す。

「ま、どーでもいつか。」

白夜はあまり深く考えず再び歩き出した。

新緑を蓄えた楠木の下、ベルベツドのような芝生にシートを敷いて白夜を待っていた桃瀬が手を振る。

「こっちだよ。白夜君。」

「ゴメン、待たせた。ねえ、いいつていうから俺何にも持ってきてないけど、購買でパンでも買って来ようか？」

「大丈夫。白夜君のお弁当もちゃんとあるよ。」

はいっというて蓋を開けた箱の中にはおにぎりと共に色とりどりのおかずが詰め込まれている。量としては確かに男女二人で食べても十分足りる。

だが、ランチの約束を取り付けたのは今日のはずだが？

白夜の疑問を読み取ったように、桃瀬が応える。

「あのね・・・あれから冷静になって考えたんだ。あの時はオトモダチの言葉を鵜呑みにして白夜君に酷いことしちゃったけど白夜君はそんな軽薄な人じゃないって。だから今日こそはちゃんと話し

をして仲直りしたいなって・・・。」

伏せ目がちの桃瀬の頬がほんのり赤い。

感無量。

白夜は内心で滂沱の涙を零し感激に打ち震える。

禍福ゲージは＋７の高得点。

桃瀬に促されシートに腰を下ろす。差し出されたおにぎりを右手に、ピンに刺した可愛らしいタコさんウィンナーを左手に。

「ご、ごめんね。手作りのお弁当なんておこがましくて。でも、この間酷い事言っちゃったお詫びも兼ねて一生懸命作ったんだ。だからその・・・。」

うわっ、なにこのラブラブ新婚さんモード。俺に至福の絶頂で死ねとおっしゃるッ？

あまりの幸福感にうつかり天国に飛び立ってしまいそんな自分を叱咤して白夜はぎこちなく腕を動かす。

「いたっ、いただき、き、ま・・・・・・ホゲ？」

ぶっ倒れるのはせめて弁当を食べてから、と口をあーんと開けておにぎりに齧り付こうとしたところでグツと襟首が掴まれた。その強い力に引かれ、白夜は否応なく立ち上がる。

状況が把握出来ないまま首を巡らせさらに思考は混乱した。

そこに立っていたのは真夏の影法師みたいな陰りを纏った黒井音子で。

「来い。」

「嫌」

いきなりの命令に白夜は素で即答した。

途端、鬱陶しい前髪に隠された瞳が不穏な光を放ったような気配に、白夜はビクウツと飛び跳ねる。

「最悪の状況を招きたくなくば今すぐ来い。」

地を這うような声音に抑揚はないが、抗いがたい威圧感がある。

白夜はそれに気圧されつつも未練がましげに桃瀬を振り返った。
が、

「白夜君行ってあげて。黒井さん、何かのつぴきならない事情があるんだよ。ランチは残念だけどいつでも機会はあるから。ね？」
真面目腐った顔で説得されてしまった。

脱力したところを黒井音子に捕捉されズルズルと引き摺られながら、
白夜は遠ざかる幸せに暗涙した。

少し離れた躑躅の茂みががさつとなつて男子生徒が数名頭を出した。
「どーいうことだ。白夜が黒井音子に連れ去られたぞ。」

「これはもしや・・・三角関係・・・？」

男子達は顔を見合わせ、次の瞬間四方に飛び散った。

噂は（特に恋愛沙汰は）電光石火の勢いで校内に広がる。

そんなこととは梅雨知らず、桃瀬は立ち上がると大きく伸びをして、
いそいそとシートを仕舞いだした。

教室に行けば誰かしら友達が弁当を広げているはずなので仲間に入
れてもらうつもりだ。

フワリと何かが視界の端を横切り怪訝に顔を持ち上げる。

薫風に泳いでいたのは白いタンポポの綿毛のような塊だ。しかしか
なりデカイ。

「何の植物の種かしら？」

綿毛はまるで意思を持っているかのように伸ばされた手を搔い潜り、
吸い寄せられるようにプリーツスカートに付着した。

摘み上げようと上体を捻り

ズキン

腰に焼け付くような激しい衝撃を受けて桃瀬はガクンと膝をついた。

第一話 の十一

「ねーどこ行くの？」

逃げられそうもないことを確信して、自力で音子の後を歩きながら、白夜はウィンナーの足を一本ずつ味わうように租借しながら尋ねた。音子の足が止まり、入れというように顎をしゃくる。ドアの上のプレートを見上げて白夜は眉を顰めた。

悪名高き美術室。

「黒魔術の生贄なら懇切丁寧に遠慮します。」

「入れ。」

にべのない命令に白夜は渋々中に入る。

イーゼルの林の先に製図用の机があつて、その一郭に一心不乱に何かを書く三人の女子生徒の姿があつた。

その中の一人が音子に気付きニヤリと笑う。

「今日は珍しく遅かったですね。シュバルツカツさん。」

邪悪な笑みに鳥肌を擦りながら白夜は音子に顔を向ける。

「ナニ？黒猫」

「一応本名。」

「本名……？エッ！まさか音子ってネコって読むの？」

本気で驚く白夜を無視して音子は着席した机に道具を広げ黙々と作業に取り掛かる。

どうやら自己製作の漫画、所謂同人誌というやつだ。

「うう……オタク集団だ……」

「腐女子」

「は？腐女子？」

「腐った女子とかいて腐女子。今はそう呼ぶものだ。」

「いや、傲然と言い放たれても……」

その隣で作業をしていた女子が白夜に向かってニヤリと片口だけを吊り上げて嫌味っぽく笑う。

「ほほう。カツさんと同クラスの東郷白夜ですな。花を渡り歩く蝶のように数多の女の間をヒラヒラと舞う武勇伝はかねがね……。ですが実情はどんなものやら。クッククク……」

白夜は図星を言い当てられた羞恥と怒りで顔をカーンと赤くする。

「うつさい！いい歳してエッチの工の字にも興味ないような不健全なオタク集団に何もかも言われたくないねっ！」

叫ぶ白夜にトンつと本が渡される。女子が好みそうな中性的な少年が表紙の単行本だ。

何気に中を開いてみて、ブハツと鼻血を噴出した白夜は床に平伏した。

「な……何コレ。『嫌じゃないだろう？』そう言つて一男は真人の××した××を舌で××した。『ああ、ダメ。いつちゃう……。いつちゃうよ。パパの手、すぐく気持ちイイ。』真人は舌ッ足らずに義父の名前を呼び、ぎこちない仕草で一男の××い××した××を××した。——つて、身も蓋もない過激表現。つか、義父犯罪ッ！なんなのこのディープに即物的な世界はっいやああああ——」

「アレを音読するとは意外にツワモノですな。」

「鼻血垂れ流しでね。」
「参りました。」

月とスッポンほどの格の違いを見せ付けられ白夜は降参する。

「暫くその辺で大人しくしている。」と音子に言われ、白夜は教室の片隅で鼻にティッシュを詰めて読書タイム。

その間、少女達が一心不乱に動かすペンの音だけが不気味に続いていた。

ところで、と割り込みが入ったのは不意のこと。

「ワタクシ次のネームに頭を悩ませていたのですが、教師と生徒などどうでしょう。オリジナルなのですが、元ネタはすべからく彼と

今話題の天使教師で。勿論教師は男に変えさせていただきます。」

「教師×生徒は手垢に穢されまくってますからねえ。よほどのインパクトがなければ難しいのでは？ワタシ個人は鬼畜教師・攻×ダメ美少年が好きですけど。」

「ダメ美少年はカマッぽくなるのが少々興醒めですね。ツンデレ教師・受×ヤンチャ少年・攻が基本的に好みです。」

「定番だな。いっそむつつりセクハラ不細工科学教師と大ボケ美少年との絡みとか・・・」

「やめてーッッ。俺を元にそんな恐ろしい話を無表情で語るなーっ。」

耳を塞いでブンブンと頭を振った拍子にようやく流血の治まった鼻からぼろっとティッシュが転げ落ちた。

「こんなところにいるのはもう嫌だっ。大体、何の理由があって俺はこんな魔窟に連れてこられたわけっ？」

「×切間近で忙しいからだ。」

「意ー味ー不ー明ー。用が無いなら俺帰るヨ。」

むっと口を尖らせ扉に向かおうとしたところで、音子が「来た」と呟いた。

第一話の十二

カラ・・・と音がしてドアが開いた。

「・・・白夜くん」

「桃瀬？」

たつ、と教室に駆け込んできた桃瀬が白夜の胸にしがみ付く。

「白夜君・・・お願い。私と一緒に来て。」

「ちょ、ど、どどしたの桃瀬。」

来てと言われれば何処にでも行きますがっ！？

フワリと香るシャンプーの甘い匂いと、胸に押し付けられた柔らかな感触に鼻血決壊のカウントダウン。

白夜は眩暈で覚束無い足取りながらも桃瀬に促され傀儡のように歩き出す。

が、

「ソイツはニセモノだ。」

冷やかな突っ込みに現実世界に連れ戻される。

「いい加減なこと言うなっ。なにがどうニセモノ？」

眼前で繰り広げられるラブシーンに動じる様子もなく作業を続けていた音子は顔も上げぬまま端然と言い放つ。

「その娘の性格からしてこんな行動はとるまいよ。・・・というのに付け加えて、すこぶるつきに女運の悪いオマエにそんな展開は有り得ない。」

「前半はともかく、その後半余計ーっ。つか、憶測で自信ありげに断言すなっ！」

喚く白夜を桃瀬が引つ張る。

「いきましよう白夜君。彼女きつとヤキモチ妬いているんだわ。」
扉に向かって歩き出した二人に音子はやれやれと溜息をつき、立ち上がった。

「では——、例えば今から私がこんなものを投げつけたとして、その娘はどうなると思うね。」

「ちょ……く黒井っ、サン？」

音子が胸の前で構えた拳の指の間にはGペン丸ペン……と各種のペンが挟まっている。

白夜が反射的に庇おうとするよりもペンが風を切るほうが早かった。絶叫を迸らせ、胸にペンを突き刺した桃瀬の姿を顧みるが、白夜の視界に映ったのは無機質な床だけ。

トン——と頭上で小さな音が鳴った。

「……え？」

高く跳躍した桃瀬が天井を蹴り、黒井音子に向けて一直線に急降下する。

バキッ——と、礫音を上げて床に輝が入る。

寸で、陽炎のようにスイ……と後ろに退いて鉄拳を交わした音子は、僅かに体を屈めて肉薄する桃瀬に囁いた。

「雑魚が。私に楯突こうなど百万光年早い。」

ドウツと音がして手加減無用の蹴りが華奢な体を打つ。

桃瀬はイーゼルを跳ね上げながら部屋の対角線まで吹っ飛んだ。

「……なんだコレ……」

CGだ。さもなくば夢をみている。

常人であれば起き上がれないほどの衝撃を受けたはずの桃瀬は、恨めしげに音子を睨むだけしてヨタヨタと美術室から出て行った。

その尻の辺りにバニーガールのような白い尻尾が付いているのを白夜は見た。

「あれが娘を操る者の正体だ。」

「はい？正体……操るって……。エエッ！じゃあ、今の桃瀬はホンモノって事？」

「肉体はな。分泌物は究極のアップー系ドラッグ。神経、感覚、肉体とも活性化されるため、生身でもあれしきのダメージで壊れることはあるまいよ。」

「ぶ、分泌物って？」

「今のヤツラは親株に餌を誘いこむために放たれた餌。いわば詐欺師がばらまくダイレクトメールみたいなものだ。餌に付着しそこから毛根を伸ばして幻惑作用のある成分を注入し餌を操る。分泌物の常用性を利用して親玉の下へ導くのと同時に、今のように餌を操りより多くの餌を誘い込む。」

「な……なんだとっ！」

白夜は愕然とした。

「するつてえとあのシロフワの妙な生命体らしき存在は、今桃瀬のあらん所に魔の触手を突き刺しているってことかつ！なんてうらやましい！」

「盛り上がっているところを悪いが腰骨の詳細には脊髄だ。」

音子は冷静に妄想を抑制する。

「この空間とはまるで違う空間の存在故、実際には倫理も成分もまるで違うが、養分摂取手段はこの植物に似ている。好物は蛋白質とグリセリン、だが基本的に雑食で、自身に特別なバクテリアのような分解機能を持ち、各種繊維や金属をもジワジワ腐敗させて吸収する。」

「ぐ、グロ……」

「ヤツラの放つ幻覚作用で、餌はあくまでトリッキイーな気分で死ぬるらしいがな。」

そこまで話した音子は教室の端へ見えない視線を向ける。

乱闘早々壁際に逃れた腐女子様方は、乱闘が終るや否や「キャッホウ世紀末万歳！」「来たれ正義の勇者！」「悪魔召喚！」などと先ほどとは打って変わったテンションで雄叫びを上げている。

カルチャーショックに壊れているわけではなく素で大惨事を喜んでいる辺りが、ある意味壊れている。

音子はその叫びのナニに感銘を受けたのか、ふむと一度押し黙り、徐に白夜に顔を戻して言った。

「よくぞいらした。この暗黒に支配された不毛の地に光を授ける勇

者よ。」

「はあああああ？」

白夜は素っ頓狂な科白に負けじと素っ頓狂な声を上げた。

「この地にはヒトの口伝に代々語り継がれてきた伝説がある。世界を闇で越権する大魔王が降臨し、恐ろしい魔力によって草民を操り人形に変える時、勇者が何処からともなく顕れ世界を混乱から救ってくれるであろう。草民の差し出す本に鼻血を滂沱と垂れ流す者、それが勇者の証。」

「なんだそりゃーっ！」

「というわけで勇者よ。変身だ。」

「なにが、というわけだよ！つか、変身なんて出来るわけないですよっ！」

「妖精たちよ。勇者の着替えだ。」

「「「イエス賢者様！」」」

ビシッと敬礼をかました腐女子三人衆は容赦なく白夜をふんづかまえる。

「ふんぎゃああああ。」

純潔が穢されるう。つか女子。男子の裸には健全に頬くらい赤らめてクダサイ。

冷血無感の女子達に服を剥ぎ取られ、白夜のほっこそ真っ赤になつて乙女っぽく涙で瞳を潤ませる。

「変身完了。」

ものの数分で作業を終えた三人はふうと額の汗を拭って出来栄えに胸を張る。

シンプルだが猟奇的なピンクのワンピース。白いタイツにサンダル。極めつけは十字の刺繍が入った帽子。

「ふん。スタイルが良いので中々映えるな。その武器^{あし}を目立たせるべく、もう少し丈を短くするか。」

「わーい誉められた・・・って、なんにも嬉しくないわっ！なにをどう血迷って花の男子高校生がナースよっ？」

「ありえない格好で正体を明かさないので正義の味方のお約束だ。」
「明かさないというか、明かせないだらっコレ！つか、顔諸出しジヤン！」

変態だと思われるうゝ、と泣く白夜に、白粉がパタパタ、ルージュがキユキユ、仕上げに眼鏡が装着される。

「まるっと別人。」

「絶対嘘」

床に泣き崩れてしまった白夜を音子は上から不可視の視線で見下ろした。

「では、あの娘・・・桃瀬香里を見殺しにするか？」

ギクリ、と白夜の心臓が不穏な音を上げる。

「あの娘だけではない。オマエが気付いているかは知れないが、最近欠席者が多いと思わないか？このままほっておいたら行方不明者は校内を問わずさらに増え続けることだろうよ。」

ニヤリと音子が嗤う。

白夜は床に突いた掌をぎゅっと握った。

見殺しにする——その弱さは、悪意を持って人を傷付けることと同等の罪だ。

「行く。」

白夜は立ち上がった。

正義などという強い意志はないけれど、自分の良心にかけて。

着いて来いというように走り出した音子の後に続いて白夜も廊下へ飛び出した。

——ひょっとしなくても、黒井音子が何とかすればいいだけの話では？と白夜が気付いたのはずっとずっと後になってからだ。

第一話 の十三

「なんだあれ」

中庭に突然盛り上がった植物に生徒達はこぞって窓縁から顔を覗かせた。

形はうつばかずに似ている。

緑と紫の斑で、蓋付のひょうたんのようなものが鳶の先に幾つもぶら下がっている。

ラフレシアのような肉厚の花が咲いていて、その中央から絶えずタンポポの綿毛のようなものが飛び出してくるので辺りは直ぐにも霞かかったように白くなった。

突然降って沸いたように見えるが実は降り立ったところから地下茎を伸ばし、伸ばしたところで生育し、少しずつ移動してきた。

置きざりになった成木はしだいに枯れていくが、状態がよければ新木と分かれて生育する。

今回は不幸中の幸いか今のところ成木は一株に止まっている。

明確な意志という物はないが、餌を狩る本能を持っている。

餌の数が多いのはさることながら、大好物の香りを嗅ぎ付けて学校にやってきた。

彼等の認識でいう大好物の餌とは絶対神でいうところのポイントゲッターだ。味にどれほどの違いがあるのかは不明。

綿毛に付着され、また付着した生徒に誘われ、生徒がぞろぞろと中庭に向かって集まってくる。

「でかつ。無理！アレを俺にどーしろっていうの？」

中学校舎第二のテラスに上がり眼下の巨大植物を見た白夜は途端に弱気に叫ぶ。

音子はフワリと近寄ってきた綿毛をGペンで突き刺しながら思い出したというようにあるものを取り出した。

「今回の武器。というか薬だ。」

「え？今これどこから出た？」

ペットボトル大の注射器二挺。肩からぶら下げられるように親切にもベルトがついている。

「親玉の植物もどきはコツチの注射器一本分を注入すれば枯れる。

綿毛に取り付かれた奴等にはコチラの注射器。メモリ一個分で正気を取り戻す。安心しろ。あの植物もどきは地下茎を伸ばす程度で猛獣のように襲い掛かったりはしない。」

「ホント？なら楽勝かな。」

「ヤツの周囲には分泌物が揮発している。幻覚に惑わされてうっかりあの袋の中に取り込まれたら最後だということは肝に銘じておくがいい。」

「エエッ！」

反射的に逃げ出そうとした白夜から音子は渡したばかりの注射器を一本奪い尻にブスリと突き刺した。

「いーっただただ！」

「コレは予防にもなる。成木の幻惑作用の前でどれくらい効くかは知らんが、気休めくらいにはなるだろう。」

「アリガトウ……って何かちよつとクラクラするんですけど？コレ厚生省の許可は下りてます？」

——むう。間違えた。

注射器に走り書きした『成木用。原液百%』の文字に音子は賢明にも口を噤む。文字が絶対神のものであったことに感謝だ。

白夜が唸っている隙に注射器を摩り替えて、さあ行けとモンスター退治に駆り立てる。

「な、何か今……変えませんでした？」

「早く行かぬと皆溶けてしまうぞ。」
そうでした。

白夜は慌てて立ち上がり、思い出したように音子を振り返る。

「で、クロちゃんは何してるわけ？」

「遊ぶつもりはない。これ以上被害を拡大させないためにこの予防液を校内にばら撒いてくる。……というかノラネコ風情の呼び方をするでない。」

「黒猫だからクロちゃんでしょ。ほんじゃ、行ってくるヨ！」

「健闘を祈る。」

二本指をピツと胸に翳す一風変わった敬礼を受けとり、白夜は柵をよじ登った。

第一話 の十四

行く末の見えぬ展開に校内の不安がピークに達しようとした時、中学校舎第二の中二階にその人物は現れた。

「アッパーな夢を与えようとも所詮幻……。健康極まる草民をジヤンキーに仕立て上げる悪い奴。このナースエンジェルが真実の愛を教えてあげてよっ！」

——実はこの少し前

『今校内の水道に予防薬を混入した。ヤツ等の餌食になりたくなくば早急に呑むべし。』

と、校内放送が入り、生徒の大半は我先にと水道へ急いだ。

『なお、適量はうがいコップ一杯程。呑みすぎると嘔吐感が起こるようなので注意されたし。』

「げろげろーっ」

大量に水をがぶ飲みしたうっかり者が校内でもんどり打っていることなど知らず、白夜は植物もどきに向けて口上を轟かせた。

ちなみにこの恥ずかしい科白は注射器に貼ってある黒井音子特製のカンペだ。

放送を聞き逃した少数派のうっかり者が、突然現れた正義の使者に声援を送る。

「いいぞおおーエンジェルナースッ！俺にも注射してえ——」

「……俺的には男の野太い声援より女子の黄色い声援のほうがやる気であるんだけど……。」

緩く方向性を間違えた声援にブツブツいいながら白夜は雨樋をモタモタと伝って大地に降り立つ。

恐る恐ると植物もどきの親玉に近づいていくが、音子の言ったとお

り飛び掛ってくる気配はない。

それで少々余裕を取り戻した白夜は、興味がてらツボの一つを覗いてみて、ぎえい、と後ろへ飛び退いた。

「うわわ。何かいた。何かいた。何かいた。」

犬くらの大きさの、やはり獣みたいな形をした塊がチラリと見えた。耳の変わりに尖った触角のようなものがついていたから、ひよつとしたら異世界の生命体だったのかもしれない。

ツボ一杯に溜まった液体の中で塊は蠟人形のように固まり、端から少しずつ溶けているのか角が取れて丸くなっている。

「ちよつと待つて。蛋白質とグリセリンって石鹼？・・・うわッ！てことはひよつとしてこれ死蠟ッ！」

人間の死体を長期間水の中につけていくと、表面に脂肪が浮き上がって固まり天然蠟燭が出来上がる。それが死蠟だ。

異世界の生命体が果たして人間と同じ成分を持っていたか定かではないが、独自のバクテリアとやらで死蠟を作り上げることが可能なのかもしれない。

しかもこの世界で作るより短期間で。

なにせ倫理も違う異世界の生命体なのだ。

ひええ。慌てず急げ。

虚ろな目をした生徒達が自らいそいそとツボの中に入っていくのを横目に白夜はあたふたと注射器を構えた。

いざ、神妙にいえ。神妙にいえ。

幹にブスリと注射針を刺そうとして、いきなりかぱつと開いたツボの蓋に白夜は仰天した。

開いた蓋の下から桃瀬がひよつと顔を出し、白夜に手招きしている。

「わー。何で桃瀬そこにいるの？早く出て出て！」

「白夜君こそそんなところで何してるの？そんなどうでもいいこと

は止めてここに一緒に入ろうよ。すごく気持ちいいよ。」

「ともかくさつさと……気持ちいい？え？一緒に？」

真剣に問い返した白夜は桃瀬を見てぶはつと血管崩壊。鼻血を噴出した。

既に溶解が始まっているのか、制服はところどころトロリと溶け白い肌が覗いている。

「ね、早く……き・て。」

「お、お言葉に甘えてご一緒させていただきます。」

タラタラと鼻血を出しながら手招きに応じてそそくさとツボの中に入る。

ツルリとした表面に足を滑らせ液体に真つ逆様。

溺れるっ……

ともがいてみたが、アラ不思議、息が出来る。

それより何より——

「白夜君……」

何分狭いツボの中。底に沈んだ白夜を跨ぐように桃瀬が乗り上げていて、太腿の柔らかい感触がヒシヒシと伝わってくる。

これはアップパー系ドラッグの副産物なのか桃瀬の頬はピンク色に上気し、心なしか名前を呼ぶ声も甘い。

これはもしかやヒト化雌の繁殖態勢？

「いやあ……でもあの何分高校生ですし不純異性行為はその……」

「

あまりのチャンスについて及び腰になる。

桃瀬はそんな腰抜けぶりを嘲笑うことなく、仄かに微笑を滲ませた顔をそうつと近づけてくる。

「白夜君って真面目なのね。そんなところが私ス——」

——パッ

唇が触れ合う寸前、白夜は背中を支えを失ってゴロゴロと大地を転がった。

「あいてて。何？どうし・・・あれ？天ちゃん。」

しこたま打ち付けた後頭部をさすって目を開けると心配げな桃瀬の顔——ではなく、ちよび髭の呆れ顔があつた。

「んもう！何してくれるんだよ。桃瀬といいところだったのに！」

「何が桃瀬や。桃瀬なら既に救出されて校舎内で手当てうけとるでオマエの見たのは幻覚や、げ・ん・か・くう。」

「ウソッ！」

周囲を見渡してみたが桃瀬の姿は何処にもない。

周囲では見知らぬ人達がせつせと金の輪を投げてはツボを切り裂き、中の生徒の救出に奮起していた。見たところ普通の一般人のようだが、絶対神の者なのだろう。

「ったく、慌てて駆けつけてみればノコノコツボに入って行きよるし。もうちつとワシの登場が遅うなったらどないなっただか・・・」

「幸せになってました。たとえ幻覚といえどもっ！」

「お気楽で羨ましいわ。」

天使は呆れる。

「そんなことはともかくハヨしてえな。綿毛の収集は完了して生徒達の救出は今しとるけど除草液持つとるのオマエさんだけなんやて。」

「除草液？・・・て、ああこれが。ハイハイ。」

ブスツとな。

白夜が注射をすると巨大うつばかずらもどきは急速に色を変え枯れ果てた。

袋の中から残っていた生徒を救出し終える頃には、風化が始まりいつの間にか塵となつてグラウンドの土に紛れて消えた。

救助を手伝ってくれた謎の一般人とオバケ植物に立ち向かった凜々しいナースエンジェルの話題が暫く盛り上がったが、やがてそれも

風化した。

巨大植物の消えた後には巨大な穴が開き、体育の時間に落ちて負傷した者が約一名。

天使は頑なに否定したが、絶対陰謀だと白夜は思っている。

白の章 第二話の一

昼休みの美術室にて、天子は立ち尽くし顔を引きつらせた。

「オタク化しとる……」

白夜を捜して来て見れば、オタク魔窟と悪名高き美術室で女子生徒と同化しコシコシと消しゴム掛けの手伝いに精を出していた。しかもイヤイヤというより寧ろ意欲的だ。

「おいッしつかりせい！学生の昼休みといえど他クラスのヤツと出会う社交時間。テラスに出て、女共に囲まれていた校内一のタラシ野郎はどないしたんやつ！」

「あゝそんな浅ましい過去もあつたねえ。」

白夜は消しゴムを持つ手を止めて、達観気味に頷いた。

「俺はさあ、今まで人目を気にしすぎたんだね。女の子にいい様に見られたくて、背伸びして格好つけて……でもね。俺ここにきて分かったんだ。人の目を気にせず自分の等身大の姿で生きる素晴らしさに！ここにいとホント楽なんだよね……」

「アカン。ちよろつといい事を言っているようだが、すべからくオタクの思考や。」

天子は震え上がる。

「ええか。人間人目を気にせんくなつたらお仕舞いやで！女はブックと太り、男はオッサンという生き物に早変わりや！」

「その見本のようなヒトに言われてもね。」

今は無き三段腹を思い浮かべて白夜は小さく突っ込む。

「ともかく色気を取り戻せ。色気あってこそそのオマエや！せや、ワ

イが桃瀬とのデートでも設定してやるか？あの娘で役者不足なら別のイカスギヤルを紹介してやってもええで。」

「天ちゃん……」

必死の説得をする天子をマジマジと見詰め、不意にその眉を顰める。

「……ひょっとして管轄内の禍福ゲージがマイナスに傾いているから手っ取り早く俺を使つて±0に戻そうなんて考えてる？」

ぎくっ

あからさまな動揺に白夜はああやっぱりと半眼する。

「ヒトを心配するようなふりして結局それだもんね。大人って汚い。」

「つれないこと言いつこなしゃ〜。仕方ないやんけ。今管轄内で不審な行方不明者が多発しよって人々の不安がマイナスに傾いちよるんやもん。」

天子は開き直つたようにエベレストのごとき胸を反らせてブーブーと口を尖らせた。

界限で立て続けに起きた行方不明事件。

否、事件と断定していいものか警察捜査本部も頭を悩ませている。

行方不明になつたのは十代から四十代までの十名。この数は、あくまでも警察に捜査依頼が出された数で、実際の行方不明者はもっと多いのかもしれない。

蒸発自体は珍しくもないが、行方不明者はいずれも闊達で明朗、少なくとも一つのことに取りグチグチと悩むタイプではなかったらしく、周囲の者の殆どが失踪の原因に首を傾げるような有様だ。

失踪要因が見当たらない事から何か外的要素が加わった可能性を示唆するものの、捜査線上に犯人らしき人物像は浮かばず、事件と断定するような証拠——例えば失踪者の成れの果て、有体に言ってしまえば死体——なども一向に出てこない。

当然、身代金が要求されるようなこともなく、事件性が立証出来ない現段階では警察としても単なる失踪扱いで細々と捜査を進めるに留まっているようだ。

勿論そんなのは公務員の態のいい言い訳で、失踪理由もない者が立て続けに何人も消えているのだから大事件じゃないか、というのが一般市民の本音である。

ある日突然、何の前触れもなく忽然と姿が消える。それはまるで神隠しだ。

理不尽な消失の次の犠牲者が自分になりはしないかと人々は不安を募らせている。

明確ではない、しかし漠然とした不安。それがこの界隈の禍福ゲージを緩やかにマイナスに傾けていた。

「な、頼むわ。何も禍を背負うてくれ頼んどるんやないやんけ。幸せ、幸福、ハッピーハッピー。お前さんが幸せでワイも幸せ万々歳。せやろ？」

「そう言われると、そうかな？」

「ほな決まりや！事は急を要するで今週末なんか——」

「今週末は用事がある。」

遮るように横から割り込みが入った。

紙面から顔も上げず、静かな声音で端然と言い放った音子に二人が視線を向ける。

「誰もアంతの予定なんぞ聞いとらん、……ですが？」

「無論、ソイツの予定だ。」

「寢言は寢て言え、……ではなく。家族旅行の予定もなく、友人との予定も未定とはワシも調査済みでんがな。あまつさえこの女運の悪い男にデートの約束なんぞ入っているわけもなし。」

「最後の行は余計ーっ」

白夜はむっと口を尖らせ抗議する。

音子は軽快にペンを走らせながら続ける。

「コミケに参加する。それがソイツの今週末の予定だ。何か異論がある？」

「多いにあるわいつ！あからさまにアంత、……様の予定でんがな。自分の都合にコヤツを従わせようなんざ身勝手にも程があるわ、……と思いますがな。」

「自分の都合で俺に禍福を齎す天ちゃんもどうかと思うけど」

いきり立つ天子を横目にボソリと呟きながら、白夜は言い合う二人を交互に見やり首を傾げた。

「そーいえばさ、クロちゃんって絶対人なんだ？」

カリカリとペンを走らせる音子は別にして、天子はゴインと豪快な音を上げて机に突っ伏した。

「……お、オマエさん今の今まで何も知らずに一緒にいたんかいな。暢気にも程があるで……」

「えー、だってクロちゃん別に害成さないし、知らなくても気にならなかったからさあ。」

「クロちゃん言うなーっ。」

天子は泡を食って叫んだ。

白の章 第二話 の二

「コイ・・・この方はそんじょそこいらの天使や小悪魔とちゃう。
一等級上の悪魔階級。天使階級では第二群のとはぼ同等の権利を持つとんのや。」

絶対神の空間管理者は大きく天使と悪魔の二種類に分類されている。天使は天子の所属する一般天使から三群は大天使、権天使、そして二群の能天使、力天使、主天使と続き、一群に座天使、智天使、最高位に熾天使となる。

一群は管理者の中の管理職で主だった仕事は絶対神のオフィスであり、殆ど外界に姿を現すことはない。二群は、一群と三群のサポート的存在でいわば中間管理職、外界で目撃される殆どは三群、その中でも馴染みがあるのは圧倒的に数が多い一般天使だ。

それに対し、悪魔は大きく二階級。

悪魔、そして大悪魔。

悪魔の中にあくまで階級はないが、七つのスキルがありそれを多く取得している者が立場を優位にする。

その頂点に副官のベールゼルブという役職があり、その上に大悪魔、所謂サタンが君臨する。

ちなみにこのサタン職は悪魔どころか天使も含め空間管理者の総指揮官に当たる。

前記のとおり悪魔職は天使職よりも格が上だ。

悪魔の試験資格は一般天使の実務経験を積んでから。そこで現役合格すればエスカレーター式だが滅法レベルが高いので、無難な天使コースを進んでいきながら途中で悪魔テストに挑む者も少なくない。

「このお方は代々熾天使を排出する血族のご令嬢。現在も叔父が熾天使の中の四熾天使ちゅう天使職の最上位におるくらいの、所謂サラブレットちゅうやつや。せやけど七光り思ったら大きな間違いやで。三群を飛び級するほどの実力の持ち主や。そのまま天使職のエリートコースまっしぐらかと思いきや、いきなり悪魔職に変更して・・ちなみにその試験は余裕綽々のダントツトップ編入や。」

白夜は素直に尊敬で目を丸くした。

「クロちゃんって思ってたよりスゴいだねえ。・・・ってか天ちゃん、平の中のヒラなんだね。言うなれば働き蟻とか蜂？クロちゃんに頭上がらないんだ？」

「くっ・・・・強烈なアッパーや」

天子は心的ダメージによるめく。

「ともかく悪魔を馴れ馴れしくチャン付けなんておこがましいんや。ちゅうより世間知らずも大概に——」

力説していた天子はハタと口を噤み、傍でカリカリとペン音を合奏させている腐女子生徒三人に視線を向け、途端に狼狽した。

「あわわ。しもうた。ワイらの正体はよほどの事態でない限りこの空間の者には明かさん規定があるのに・・・！ばれたら減点や。」

「そうなの？だって天ちゃん俺には全部話してくれたじゃん。」

「それはしゃーないやん。オマエさんのポイント倍率が上がって、多少なりとも自覚してもらわんことには生存が危ぶまれたんやもん。多少の減点があつたかて、オマエさんの命には変えられへん。」

「・・・・天ちゃん」

「間違つてもオマエさんを制御しきつたら減点ポイントよりずっと査定が高いから、とかそんな損得勘定してないで」

「それ言わなきゃいいのにねーっ」

白夜は呆れていいのか怒っていいのか複雑な心境で口を尖らせる。

「ようは上にばれなければよい。」

珍しく音子が口を挟んだ。

「ケルビムも全てを把握しているわけではない。周囲からのリークがあった場合、もしくは人間の間でよほど噂が蔓延しない限りバレル事はあるまいよ。」

カタンと小さな音がして、視線を向ければ腐女子三人衆が立ち上がっていた。さっきの先ほどまで忙しく仕事を続けていたはずなのに神業のような手際で机の上は綺麗に片付けられている。

「あれ？珍しく随分早い店仕舞い。」

白夜の疑問にくぐもった声音で「移動教室なので」「御用聞きで」

「図書館に寄るため」と口々の返答が返される。

三人のうち一人が代表のように口を開く。

「ご安心を。私たちはあなた方が何処のどなたであろうと周囲に吹聴する気は毛頭ありません。こんなオイシイ観察対象が傍にあってそれを私たちだけが知っているという優越感。それを無碍に放棄するほど愚か者ではないのですよ。クッククク」

ぶるつと背筋を震わせる天子を置き去りに三人は音子に向けて小さく挨拶のように頭を下げ扉に向かって歩き出した。

音子も顔を上げずペン先をちよいと揺すってそれに応える。いつものやり取りだ。

一人、二人、と音もなく扉を抜け、三番目が思い出したように振り返った。

「言い忘れていました・・・東郷白夜。妙な相が出ているが、聞きたいですか？」

「妙な相？それってイイコト？ワルイコト？」

「それこそ一口には言えませんが・・・」

腐女子生徒は明確な拒否がないのを聞く意思と見なし内容を告げた。

「友情あり、恋愛ありの感動巨編。ジンワリ胸に切ない青春と甘く心を揺るがす黄昏色の恋心、そして思いもかけない裏切り、それを温かく見守り癒してくれる思いもかけない存在の発見、正に人間模様のジェットコースター。笑いあり涙ありアクションありのアップダウン。」

「ワンクルの連ドラにしてもてんこ盛りだね。」

「いえ、二時間ドラマで。」

「超凝縮っ！」

白夜はヒエツと顔を強張らせる。

「二時間というのは冗談です。ですがおおそ一週間とか数日・・・明確な時間は判然としませんがそれほど長い時間ではありますまいよ。」

それでは、と小さく頭を下げて腐女子生徒は先に廊下に出ていた二人と共に姿を消した。

それを無言で見送っていた天子が感心した風情で呟く。

「なーんや、気楽っちゅう科白もわからんではないなあ。」

じゃあね、と手を振り返す白夜は、持ち前の愛想で無意識に笑顔だ。モテルというレッテルも伊達ではなく、無邪気な笑顔は生来の端整な顔立ちを余計引き立て、男女問わず思わず目を留めてしまうだけの魅力を備えている。

だが、相手は腐女子様。

センサーはすべからく世界のファンタジックな時事と（不細工であるうと）不毛な男同士の絡み合いのみキャッチするようで、平和ボケした王子のスマイルなんぞには頬の一枚たりとも変化を見せない。

相手が反応をみせるからその気を唆されるのであって、全くの無反応に白夜もすっかり肩の力が抜けている。

うっかり正体を明かしてしまった天子にしても、摩擦係数ゼロという腐女子生徒達のあまりのあっけない反応に多少の物足りなさを感じつつも、多いに安気になっている。

この危機感の薄さは良きことが悪しきことが。

一人物思いにふける天子を他所に、白夜はサアアと潮騒のように鳴った窓の外に視線を転じた。

薫風に二階まで伸びた桜の新緑が荒々しく靡き、飛ばされた木の葉が太陽を受けまるで風花のように白く光る。

目を眇めるほどの眩しい外とは対象に一緒に視界に映りこんだ音子の姿は影法師のように黒く、窓の隙間から滑り込んだ風が黒髪を波立たせる。

ナザレを取り巻く黒い暗い川の波のように。

「どないした？まさか見蕩れとんのかいな。」

不思議そうな天子の突っ込みに、白夜は覚醒し、曖昧に笑う。

「見蕩れてなんて、・・・いたけど。そうじゃなくて。」

白夜は気持ちを整理するように天井に琥珀の瞳を向ける。

「デジャビュ？ての。なんか俺、最近多いんだよね。・・・や、違う。前からあったのかな？自覚したのはつい最近なんだけど。鮮烈

「な赤、黒、白——」

「なんやそりゃ。色かいな。」

「うん。情景とかじゃなくて、色。なんか引つかかるんだけど、まるで何も思い当たらないし。母さんに聞いたら、事故の後遺症じゃないかって。赤は火事の炎とかもしくは血？黒は黒煙、白は・・・その日は寒くて雪でもちらついてたかな？」

「ふむ。かもしれへんな。」

曖昧な感情を繋ぎ合わせて辻褄を作りながら説明してみたものの、白夜自身まったく違うかな？と思っている。

事故の記憶にしては不安感に乏しくて寧ろどちらかといえば好感すらある。

。だからこそ追求もなくほっときはなしになっているわけだが・・・

思考を遮るようにコツコツと机を叩く音がした。

顔を向けると音子は平板と言った。

「今日はもう下がってよい。私も久しく早仕舞いするつもりだ。」

「はい。」

白夜はいそいそと手元を片付け、美術室を出た。

「ヤツはあんなこと言っとったが、ワイは諦めてへんで。必ずオマエさんに幸せを齎してやるさかいな！」

首洗ってまっとれよ！と、天子は、それではまるで負け犬の遠吠えだ、と思わせる科白を叩きつけて鼻息荒く階段を降りていった。

「なーんか会社に服従するしがない中年サラリーマンのアフターファイブを見た気分。クロちゃんに頭が上がらないなら反抗しなきゃいいのに。」

呆れながらその姿を見送りつつ、白夜もまた教室に向けて歩き出した。

——その時はまだ巨編ドラマのキャストである転校生の到来も梅雨知らず——

白の章 第二話 の三

歩き出した白夜の視界に一人の男子生徒の姿が映る。

科学実験室から出てきた彼は、作業用白衣を身に纏い、手にはビーカーやらフラスコやらが詰まった木箱を抱えていた。

何処にでもその筋のオタクはいるもので、音子を漫画オタクと称するなら、彼は科学オタク——実験大好き少年だ。

昼休みは理科室に籠り何らかの実験に明け暮れている知る人ぞ知る科学部の部長である。

実験室から出てきた直後、廊下をくつちゃべって歩く二人組みの生徒と小さな接触事故。

相手が見事な反射神経で、落ちそうになったフラスコを押さええてくれたため破損は免れた。

男子生徒は恩人にぺこぺこ頭を下げ立ち去るのを見送った後、ようやく眼鏡を落としたことに気付いたようだ。木箱を床に置きうつろと手探りする。

「メガネ、メガネ・・・」

「辰砂クンそのギャグかなり古い。かくいう俺もタイムリーに見たことないし。」

白夜は足元にすっ飛んできた眼鏡を拾って、彼に近づく。

丁度仰向いた彼に手渡すより早いか、と掛けてやると、ようやく視界が戻った辰砂は白夜を認めて人懐っこい笑顔をこしらえた。

「おお。誰かと思えば白夜君じゃありませんか。どうもありがとう

「ごきます。さすが学校一の美少年は行動もスマートですな。」

「いや、そういうわけでは。」

狙った行動ではないのだが、白夜のこういう考えナシの仕草は誤解されがちだ。

手放しの賛辞に白夜は苦笑する。

二人はどちらからともなく歩き出した。

白夜は教室へ、辰砂は多分この階の端にある科学部室へ機材を置きに。

「そういえばもう文化祭の季節ですね。懐かしいな。出会いを思い出します。」

「そうだねえ、時の立つのは早いね。」

思いつきのような辰砂の台詞に白夜もしみじみと頷く。

クラスも一緒になったことがなく趣味から嗜好性まで全く別の二人が仲良くなったのは去年の文化祭実行委員で顔を合わせたのが切欠だ。

選考日に運悪く風邪を引いて休み役員を押し付けられた白夜はともかく、辰砂はクラス委員とか各種役員によく選出される人材である。カリスマ性には欠けるが律儀な上に意外と卒がなく立ち回れるお陰でなかなか信頼度が高い。

それにプラスして人に物を頼まれると嫌といえないお人よしなのだ。

茫とした、よく言えば無邪気な貌に丸眼鏡が人のよさに拍車を掛けている。

コレで中々整った顔立ちをしているので、眼鏡を外して寝癖のついたままの髪を整えるだけで随分女の子たちに持て囃されそうだが、当人に気にする様子はまるでナイ。

人間を格好イイとかモデルとかいう評価で分別しない辰砂は白夜にとって肩を張らずに付き合える貴重な友人だ。

一方、美術室では――

白夜を体よく追い出した音子は徐に視線を壁のリトグラフに向けた。

「何か？」

そこにあるはずの絵に重なり見えるのは半透明の男の顔。
短髪に法衣の詰襟の部分だけが僅かに見える。

見知った男の顔は平板な問いかけに柔和な顔を小さな苦笑で歪める。

「指令ではないのでそう構えないで下さい。」

「お言葉だ、・・・ですがこれが普通です。」

にべのない返事にやっぱり苦笑するしかない。

「実は例の件で最近不穏な動きがあつたので蛇足とは思いましたが報告まで。何分、貴女の上司と・・・貴女の叔父殿が気に留めていらしたようなので。」

音子はフンと鼻を鳴らした。

「叔父貴はともかくあの方はそんなタマではあるまいよ。良きも悪きも流れのままに甘受して状況を心底楽しむ人だ。」

「まあそうおっしゃらず。タスク様に話を持ってきたのも実は彼の方ですから。なんととは申されましても常時気に掛けておいでなのですよ。」

それがどうしたと音子は内心で鼻白む。

常時気に掛けているのは彼にとってワクワクするような物珍しい事態がおきそうだから、であって、別に心配しているとは限らない。証拠に、音子は上司がかつて慌てふためいている姿を見たためしがない。

「ともかくお氣をつけください。」

言外に、嗜めるような、苦笑のようなニュアンスを含ませてそういった男は、暫くして思い出したように付け足した。

「裏切り者の名前は聞きたいですか？」

音子は一度沈思して、ゆるりと首を振った。

男はそれに小さく頷いて「では、また」と掻き消えた。

誰もいなくなった教室に音子の布擦れほどの眩きが落ちる。

それはこことはまるで別空間にあるはずの名前。

「相手が誰であろうと私の邪魔はさせん。」

半月のように吊り上げた毒々しい笑みでそう呟いた音子は、改めて男の消えた後に視線をやった。

「……故意だとしても笑いを堪えるのに苦労するな。」

男の消えた後には頬に手を添えて身を振るムンクの絵が飾られていた。

白の章 第二話 の四

「あーもう弱肉強食の世界なんてクソ食らえ。この狭隘な狩場に肉食動物なんざこれ以上いらねえっつーんだよ！」

「ホント。神様は俺達が弱い肉食動物に飢えて死ねとおっしゃっているのかもね。」

吠えるクラスメートの横で別の男子生徒も同意の意味で頷く。

季節はずれの転校生の話題は直ぐに学校中に広まった。

随分格好イイらしく、特に女子の間で関心が高まっている。

それもそのはず、噂によると転校生は雑誌モデルから進出したモデル兼アイドル予備軍なのだそうで、見た目のよさに輪をかけてミハーハ熱が沸騰しているのだ。

「へー。学生の分際で働いているなんてエライねえ。」

少々ズレた感心の仕方をする白夜にクラスメートの一人が血走った目で飛び掛る。

「オマエはどこまで暢気だ！これは全男子生徒の死活問題だぞ。女子の興味が全てあの男に奪われてみる。俺たちは女子と話せないどころか彼女も作れない。ばかりか、ハイレベルを知った女子たちは格下の俺達を蔑み、故に俺達は理不尽に肩身の狭い生活を強いられるのだぞ！」

「大袈裟。大体、女子はこの学校だけじゃないでしょ。」

「ケツ、これだからモテル奴はッ。皆が皆お前みたいに歩けば女にあたるって楽しい人生ばかりじゃないんだよ。」

「別にあたっても楽しい結末ばかりじゃないけど……」

ばかりじゃないというか殆ど全て悲しい経験だ。
だが、実状を知らない野郎共に白夜の嘆きなど実感出来るはずもし。

「ま、立場の弱い肉食動物の俺達はさて置き本心はどうなんだ、白夜？この狩場を余裕で掌握していた百獣の王は突然降って沸いた強敵をどう見るね？」

「どう見るもなにも・・・」

白夜はこてつと首を傾げた。

「いいんじゃない？俺お洒落な人って嫌いじゃないよ。モデルしてる雑誌でみたことあるけどさ、その時彼が着てたシャツがいいなと思って店に走っちゃっ・・・ぐほっ！」

「この太平楽っ！」

とうとうキレたクラスメートが白夜の胸倉を掴み力任せにグラグラ揺する。

ゲホゲホと噎せ込む姿を暫く上からねめつけ、難解な数式でも前にしたような難しい顔で小首を傾げる。

「なんでだろうな。普通どれほどいい野郎でもモデルというだけで男はライバル心が刺激されるものだが・・・女搔つ攫うにしてもお前ならまあイイかとか思えるんだよな。そりゃ、場当たりのムカついたりはあるんだけど。」

「ああ、なんとなく理解できる。白夜なら仕方ないか？ってカンジ？あまつさえ白夜に反発心を振るい起こさんとする自分が滑稽にすら思えてくるよね。」

「なんか誉められているカンジしない」

それは格下に視ているということではないのか？
いわゆる保護対象動物とか。

眉を顰める白夜に「ばっか、それは人徳だぞ」と二人はまるで取り合わない。

そこに、白夜達の会話を聞きながら窓辺でぢゅるゝとジュースを啜っていた男子学生が「あ」と気のない声を洩らした。

「桃瀬が例の転校生にハンティングされている。」
「ぬわに！」

北校舎の二階はテラスになっていて、天気の良い日は本やジュースを手に生徒がどこからともなく集まってくる。

桃瀬は手摺り沿いに並べたベンチの一つに友人と座っていた。
休息を満喫していたところに件の男が現れて、何か楽しげに語っている様子だ。

校則が緩くて茶髪も珍しくない学校だが、男の緋色の髪はよく目立つ。

何でも仕事の契約で暫く髪色を変えられないと学校にちゃんと許可を下ろしてもらっているらしい。

会話の内容までは届かないが、転校生の科白に桃瀬ははにかむような笑顔を赤らめ、必死に何か言い返しているようだ。

それは怒っているというより寧ろ照れ隠しのようで、必死な仕草がまるではしゃいでいるようにも見える。

白夜は途端に拳を振り上げ大きく叫んだ。

「にやろっ！偽りの愛で校内の純真無垢な女子生徒を誑かす軽薄な

男めつ。俺がこの学校の平和を守ると共に、真実の愛を教えてやる
っ！」

「お前ってホント分かりやすいよな。」

「潔いくらいに遠浅だね。」

クラスメートの呆れた突っ込みを背に白夜は廊下に飛び出していた。

階段を駆け下りいざ、テラスへ——出るずっと手前、三階の踊り
場で下から来た桃瀬と出くわした。

「っ・・・桃瀬、えつとあの、・・・・・・・・程よいお天気ですね。」

「ええ。ホントね。」

屈託ない返事に白夜は内心ジタバタと足掻く。

ズバツと尋ねたいがぶっちゃけられない男心。大体、桃瀬が何処の
馬の骨と話してようが追求できる間柄でもなし。

遠回しに会話の内容を尋ねてみようか、敵情視察に乗り出そうか、
と思索していた白夜は小柄な少女の背後からぬつと現れた人影にゲ
ツと顔を強張らせた。

聞くまでもなく本人が目の前にいる。

目線はほぼ平行。敵のほうがやや高いかもしれない。

精悍な顔立ちに燃え立つような緋色の短髪 of の組み合わせはモデルと
しての自負を物語るようだ。

鋭く尖ったような形の瞳にヤンチャ小僧のような愛嬌が技あり、と
いったカンジ。

ピアスを連ねている男なんざどこかのヤンキーがちよつと勘違いな
チャラ男くらいだと思っていたのに、なんともお洒落ではないか。
無駄な贅肉どころか必用な筋肉もやや足りない白夜にとって、身長

に見合うガツシリした肩幅と胸板は嫉妬めいた憧憬を抱くもので。

——ヤバイ。マジで敵わないかも・・・

男に対峙した白夜はあっけなく弱気になる。

「えっと、彼は昨日転校してきた迎居緋廻クン。コチラが東郷白夜クンです。」

不躰にジロジロ白夜を観察した男がふーんというように目を細めて顎を聳やかす顔には既に捕虜兵士の気分だ。

先ほどの言通り男という生き物は妙に男のプライドに拘るため敵と見なした相手には容赦なく攻撃を仕掛けてくる。かくいう白夜も顔がよいばかりに同性の誹謗中傷に晒された経験はままある。

適当な相手ならともかく、ちょっと懂れている相手にナックル装着の嫌味で臍腑を抉られるのは勘弁願いたい。

ビクビクと相手の出方を待っていると、不意に男の口が豪快な笑みを模った。

「いやー、格好イイとは聞いてたけどマジだな。なるほど王子様みたいとはよく言ったな。うん。こりゃホンモノ。」

悪意のない笑顔にバシバシと肩を叩かれ白夜はへっ？と目を見開く。

「あのね学校の女子たちが白夜君のことを誉めるから会ってみたくなったそうよ。迎居君は仕事柄格好イイ人には男女問わず興味があるんだって。それで私が仲良しだって聞いたらしくて紹介を頼まれたの。」

「俺に？」

言われたことがにわかには信じがたくて白夜は呆けた面持ちで反芻する。

「えっと・・・じゃ、言い寄られてたとか、チョツカイかけられてたとかそんなんじゃない？」

まさか〜というように桃瀬は首を振る。

「いやでも・・・なんかさっきテラスで話しかけられてすごく楽しそうだったというか嬉しそうだった、というか・・・あっ、別に覗きとかじゃなくてたまたま偶然、ぐほっ！」

「やだあ、別に嬉しそうとか全然違うし！」

アバラよ折れよといわんばかりの突きを食らって白夜は咽こむ。

全然違うといいながら桃瀬の顔は真っ赤で、即答の前面否定もこうなると甚だ怪しい。

珍しくもちよつと壊れかけの桃瀬から視線を外し、緋廻に向けると緋廻はニヤリといたずら小僧のようなウィンクを見せた。

「俺はこう見えて意外と礼儀正しいんだ。初対面でヒトの女にチョツカイ出すほどケツ軽くねえって。」

「ヒトのオンナ・・・？」

さてここで問題です。

オンナって一体誰のことでしょう・・・もとい、ヒトって誰の？

「やだ、さっき誤解だつて言ったのに。私と白夜君は友人です！あ、二人とも気があうみたいだから案内役の私はこの辺で戻るね。」

不自然なほど陽気に捲くし立てた桃瀬は止める隙もあらばこそパタ

パタと軽やかな靴音を響かせて階段を駆け下りていつてしまった。

ヒトとは猿人類から発達した二足歩行の生き物で、人という字は二人の人間が支えあつてできています。

遠ざかる桃瀬の足音を聞きながらそんなことを考えていた白夜はどんと背中を小突かれ覚醒する。

「どうよ脈あり？」

「アンタええヒトや〜。」

白夜はあっさりと男に傾倒する。

「改めて、俺は迎居^{ムカイヒマワリ}緋廻。ご紹介の通り、男でも女でも綺麗なヤツは大好きだ。勿論、妙な趣味じゃなく。お前、格好イイ割りに性格も可愛いっぱいし気に入った。これからよろしくな。」

クサイ青春ドラマでもあるまいに緋廻は握手の手を伸ばす。

そのなんとスマートで格好イイことか。

「こ、こちらこそ。」

格好イイ上になんて男らしく清らしい人なんだ。

白夜は妙な感動と憧憬を覚えて、気恥ずかしそうにその手を握り返した。

白の章 第二話 の五

「白夜いるかあゝ。」

仕事の都合で昼休みにようやく登校した緋廻はいの一番に白夜の教室を覗きにきた。

真夏のヒマワリのような男に、教室内で他のクラスメートと談話していた白夜も笑顔で手を振り返す。

緋廻は周囲の興味の視線に臆する様子もなくズカズカ教室内に侵入し、白夜の前の椅子へ腰を下ろす。

「あーもーチョーやべえ。俺これからスーガクだけど当たるよ絶対。あの先公日付と出席番号順だもんよー。」

「あータカタ先生ね。・・・あ、俺ンところ午前中に数学終わったからノート貸そうか？多分、ヒマのクラスより進んでるでしょ。」

「マジ？チョー助かる。」

売れっ子モデルだけあって、遅刻早退欠席が多いが、それでも学校に来たときには必ず白夜の元へ現れるのが通例になっていた。

ノートを受け取りながら緋廻は思い出したというように左手を見せる。

「これどー？」

「格好いい」

皮紐を二重に巻いてトップにシルバーの剽悍がついているブレスレットだ。留め金のところにチェーンがあしらってあるのも洒落ている。引き締まった浅黒い二の腕にとても良く似合う。

白夜の即答にそうかそうかと上機嫌で頷いた緋廻は、手際よくそれを外し、白夜の手首に付けた。

「やる。つっても午前中の撮影で使ったやつでさ、ほらここちよい傷ついて店に戻せないって、貰いモンなんだけど。俺、似たの持ってるし。」

「ええ〜でもなんか悪い。それに俺（脆弱タイプだし）こーいうの似合うかな。」

「ま、俺とはカンジ違うけどな。お前の場合シルバーが引き立って上品なカンジすんのな。お忍びで夜遊びに出かけるプリンス？みたいな。」

「も〜口上手いなヒマは。」

そんなフレンドリーなやり取りに、少し距離を置いたところから眺めている男子生徒達は揃って微妙に顔を引きつらせる。

「・・・思いつきり食われてるし。」

馬鹿だ馬鹿だとは思っていたが、敵に頭から食われて骨の髄まで虜にされている。

尤も白夜が構われるようになって緋廻が他の女子にチョッカイをかけることもなく、モテナイ大多数の男子生徒にとって願ったり叶ったりの状況だが、なんとなく面白くない。

白夜がどれほどモテようが、モテナイ俺達の八つ当たりサンドバツク。

そんなことを思う大多数は、緋廻が登場するのと同時に逸早く撤退していた。

この二人組みの間に入ろうなんざ至上稀に見る勘違いサンか、よっぽど美的感覚に乏しい愚か者だ。

「そーいや、今度の日曜お前空いてるか？」

「日曜？」

「そ、ヒマなら俺と付き合わね？撮影で海行くんだけど一緒にどうだよ。モデルの子紹介してやるし皆ではしゃぎましようや。」

わ、行きたい行きたい！そう即答しようとして身を乗り出した白夜の鼻先を腕が掠め、机でダンツと物凄い音で遮った。

「生憎やけど週末は用事あんねん！」

「はれ？天ちゃん。」

仰のけば天子の姿をとった天使がそこにいて、官能的な美貌を般若のように歪めて仁王立ちしていた。周囲では、クソッなんで天子先生が白夜を、と男子生徒が身を振り、女子生徒が、ケッ淫乱教師が、と齒軋りする。

「お前、天子とデキてるってマジだったん？」

「誓って事実無根。」

白夜は即答する。

あつてたまるか、だ。

どういわけか天子は一目見るなり徘徊を目の仇にして、白夜に言い寄るのを何かと邪魔してくる。

内情はさて置き、傍目にはエロ所教師がせっかく手に入れた可愛い玩具を男友達に横取りされるのを躍起になって阻止しているように（多分周囲はそう信じて疑っていない）、白夜は理不尽なやつかみに晒されている。

天子は白夜の被害など鑑みることなく、勝ち誇ったように胸をさらせ宣言する。

「週末は黒井音子の先約があるんや。残念やったなクソガキ。」
「・・・それ天ちゃんがえばるところ？」

突っ込みつつ、白夜はそうでした、と溜息を吐く。

約束といっても一方的に決められたことなので用事があると断われは断われなくもない気もするが。

先約を反故にできない生真面目な性質なのだ。

白の章 第二話 の六

緋廻は怪訝に首を傾げる。

「お前、黒井音子とデキテルってマジ？」

それも、まさかです。

否定しようとして、今度は周囲のギャラリーに遮られた。

「その通り！こう見えても白夜は悪の密教祖、否、既に悪魔と同格の地位を獲得した黒井音子の魔術により、主従契約を結んだ彼女の下僕なんだぞ！」

一人の熱い叫びに周囲もそうだと賛同する。

微妙に事実が含まれているが、殆ど間違っている。

第一何故こいつ等は吾が事のように胸をはって人の奴隷宣言をするか・・・。

白夜は乾いた笑みを浮かべる。

綿毛事件の時に黒井音子に拉致された事で一時期関係が噂されたが、いつの間にやら恋愛関係から主従関係にシフトしていた。

そちらのほうが世間一般の思考にフィットしやすかったのだろう。

ある意味どんな戯言も魔術で統一してしまうことこそ黒井音子の魔術といえる。

「ところで、こないだから気になってたんだが。何だアレは。」

緋廻が顎をしゃくった先、廊下側の最尾席の音子の周りには、魔窟に籠っているはずの腐女子様方がこぞって凝っている。

双眼鏡、ビデオカメラ、携帯の写メとそれぞれの得物を二人に向け、

ハアハアとあぶなげな息遣いである。

クラスメートたちはもはやそちらに目を向けず、とはいえ全くナイモノとして無視しきれるわけでもなく、音子の周囲は不可視のシールドが張られたみたいに不可侵な空間が出来上がっていた。

路上で露出狂にばったり出くわしたとて鬱葱とした笑みで一言「貧相」と撃退するであろう女子様方は、美少年二人のタイアップに激しく取り乱していた。

興味があるなら会話に招いてやってもかまわないが、きっと彼女達ならば「覗き見こそが王道！」と言って憚らないだろう。腐っている。

引きつった顔で腐女子凝りを眺めていた緋廻は苦笑と共に小さく呟く。

「・・・つたく、邪魔なのが色々憑いて面倒な・・・」

それは独り言のようで。

何？と聞き返す白夜に緋廻はなんでもねーよとカラッとした笑みを返した。

「そんなじゃま、しゃーねえけど日曜日のデートは諦めるわ。また今度な。」

「ん。数学頑張つてね。」

「おう。ノートありがとな。」

ノートを片手に立ち上がった緋廻と迎え撃つ天子との間で一瞬火花が散った。

教室を去り際、緋廻は音子にも一瞥をくれたが、イイ男がバラになった途端腐女子様がたの興味は胡散霧消したようで、机に戻った視

線は微動だにしなかった。

徘徊の姿が見えなくなって途端、天子が厳しい顔で白夜に詰め寄った。

「お前さん、あの男だけは止めとけ。近づいたら絶対アカン！」

一方的且つ勝手な言い分に白夜は眉を顰める。

「何で？最初は容姿を鼻にかけたいけ好かない男かと思ったけど、全然フレンドリーだし優しいし徘徊イイヤツだよ？拒否する理由全く分らない。」

「せーやーからー。」

忌々しげに言いかけた天子は周囲の視線に気付いて「ここじゃ言えん」と地団太を踏んでもどかしさを訴える。

「ともかく！コレだけは忠告したたるが、ヤツの愛想や気遣いなんざ演技やえん・ん・ぎいい。アイツ絶対メチャメチャ悪い奴や間違いない！」

「そんなことない！あいつは絶対いい奴。誰がなんと言っても俺は信じるし！」

睨み合う二人の間で火花が散る。

さらに激しい口論に突入しようとして、思いもよらないところから制された。

「ダメダメ鬼畜ホストに絆されるオトボケサラリーマン。勿論男」

「必殺『あの人を分かってあげられるのは世の中で僕だけ？』攻撃」

「それを心配する口実で無理矢理手を出すツンデレ上司。勿論男」

「本人は精々格好を付けているつもりだが、いかんせん嫉妬丸出しが萌えポイント。」

ボソボソと——本人たちは至って内輪の会話らしいが筒抜けの内容にクラス中がリリースした。
勿論、発信地は腐女子凝りで。

設定が学園モノから社会人モノに変換されているのは何故？
つかせめてそこ、サラリーマンじゃなくてフツーにOLとかでいいじゃん。つか、OLにして下さい。

一同は内心で仲良く突っ込んだ。

腐っている。

白の章 第二話 の七

そんなこんなで数日が過ぎ、待ちに待ったわけではない日曜日がやってきた。

白夜は召集命令に従って朝一の最寄の駅前に来ていた。

小学校の時に徹底された五分前行動が染み付いて、約束の時間の五分前に現れたというのに、集合場所には既に腐女子のお三方が顕現していた。

顕現——適切な使い方ではないかもしれないが、彼女達に関してはどうしてもしっくりピツタリした表現だ。

白夜は染み付いたマニュアルどおり女子の服を誉めようとして——言葉に詰まった。

一番マシなのはカットソーにフレアスカートだが、そのスカートのプリントたるや殺人一覧表かと疑うような惨殺体のリアル画。

一見、ゴスかと思われる二人のうち一人はゴテゴテと刺繍が入った赤シャツに膝下の丈が微妙な長さの巻きスカート。こっちは何故か小さなガラム付の妙にアジアンテイスト（変な幾何学文様染め）のもの。

もう一人はオーガニックコットンのケミカルレースがもこもこと、まるで洗顔用泡立てスポンジのような有様のワンピースで、どうみても毛を刈りそこなったプードルか羊そのものだ。

普段個性に欠けると蔑まれている制服がいかに素晴らしい代物か、今改めて思い知った。

薄手の白いサマーセーターにジーンズという凡庸なセンスの白夜は、奇抜な個性が光捲くる腐女子様方のセンスについていけず暗涙する。

そして時間きっかりに訪れた音子にはもはや乾いた笑みしか浮かば

なかった。

美少女アニメキャラがデカデカとプリントされたＴシャツに、今時何処で売っているとも知れぬモンペのような（つまり腿の辺りが広く裾にしたがつて締まっている）ジーンズ。チエックのシャツを羽織って鞆をたすき掛け。

潔いまでに堂々としたオタクスタイル。

これはある意味でコスプレなのかもしれない。

そんな奇妙な五人組は、両手一杯の紙袋やらダンボールやら、キャリヤを引いて、目的地へ向かった。

普段は外国車をはじめ各種企業の展示即売会を催したり、歌手のコンサートを開いたりする大型施設だ。

開場はまだ先だから、今ぞろぞろと入っていく人達はみな売り手なのだろう。

中には明らかにコスプレと分かる奇抜な格好の人も一杯いて、五人組のインパクトも薄らぐ。

割り当てられたブースに到着し『売れるコンビニテク』見栄えする商品の置き方で冊子を並べている間に会場の時間が差し迫ってきた。

「さ、コレで終わり。」

最後の冊子を並べ終えた白夜はほっと息を吐きながら、「売れるといいネ」と冊子を撫でた。

中身は推奨しないが、一応消しゴムがけを手伝った身分なので思い入れてしまう。

「いくなれば娘の貰い手を捜す母親の心境だね。」

しみじみと呟いていると「おい」と抑揚のない声音に呼ばれた。

「お前にはまだ売り子という大事な仕事が残っているのだからな。こんなところで感慨に耽っていられては困るぞ。」

「売り子かぁ。おもしろそ。やったことないけど任せ——」

白夜の言葉が終らぬうちに音子がパチンと指を鳴らした。

途端、白夜はアリが群がる角砂糖のように腐女子様方に飛び掛られた。

叫ぶ間もない。

きっかり三分後、白夜は筆舌しがたい世の不条理をなんとかしていいものか途方に暮れた。

「コスプレ。コスプレかぁ……。ま、いいよ。ここお仲間一杯いるし、段々免疫ついてきたし————っで、なんでっ、俺っ、コレっ、落ち武者っ!？」

立派なお屋敷の五月節句のような鎧兜はともかく。

随所に鏤められた刀傷や折れた矢に、どす黒い血糊の装飾はいかに。

白夜は遠方を行過ぎるサムライを指差して音子に抗議する。

「戦国ブームならフツアレでしょッ! なんて名も無きヤラレ侍よっ?」

「モノマネ大会でもあるまいに同じキャラで精巧度を競い合っても仕方あるまい。ブームに則りつつ、目立つ。それこそがコスプレの、売り子としての真髄であり使命。」

「う……。正論」

白夜はがつくりと頂垂れた。

「ほら、そうこうしているうちに客が来た。しっかり頼むぞ。」

開場のアナウンスが流れ、気の早い一番客がぞろぞろと会場入りする。

その団体からはぐれた一人が迷わず音子たちのブースにやってきた。

「シュバルツさんの久し振り〜。」

「ああ。態々足を運んでもらって済まぬな。」

音子はいつになく愁傷な挨拶をする。

どうやら音子の知り合い・・・というか、どうせ音子の知り合い。
趣味交われば素っ頓狂。俗に類友ともいう。

なんの期待もなく僅かに視線だけを向けた白夜はその途端、大きく
目を見開いた。

いの一番に視界に飛び込んできたのは、形大きさとも最高級マスク
メロンに匹敵するような神々しいバスト。

その魅惑の果実を付けた幹は驚くほど細く、Ｔシャツの袖から覗く
腕も蔓のように細くしなやかだ。

Ｔシャツに迷彩柄のカーゴパンツというちょっとボーイッシュな井
出達だが、Ｔシャツはラメの入ったマトモなやつだし、コケティッ
シユなカンジがとても良い。

音子と近況報告などで盛り上がっている赤いキャップの下横顔を
マジマジと見て白夜は驚愕の声を放った。

「ウツソ！グラビアアイドル茜沢マミリンっ！」

ちょっと釣り上がり気味の大きなネコ目と、そのナイスバディーで
彗星のごとくグラビア界の頂点に躍り出た新人アイドル。

サバサバした性格を露にしたようなちょっと小生意気な雰囲気の子
猫のような可愛い容姿にマッチして、男心を攪る。無論白夜も攪り
倒されている。

その絶叫に茜沢は「うん？」と顔を向け、途端に目を輝かせた。

「わーナニコレ落ち武者っ！ちょーウケル！やられ具合がゼツミヨ
ウ！ナサカワっ！」

「な・・・なさかわ？」

「情けなくて可愛いという意味だ。」

情けないといわれて喜んでよいものか・・・でもキモイよりマシか？

少々の葛藤を覚えつつも白夜は素直に誉め言葉として受け取る。

「すっごいね〜クロちゃん。こんな有名人とお友達なんだ!」

「まあな。」

「ホント得体知れなあ〜い。」

「得体の知れないのは駄目か?」

「全然嬉しいデス!」

心からの返答に音子はよろしいと頷き、茜沢に顎をしゃくつた。

「ところでどうだ。時間があるなら今からコイツの営業に付き合わんか。」

「オツケー。あ、でもプライベートだから顔出すのはNGなんだけど。」

「構わん。」

どんな関係だか知らないがどこまでも横柄な物言いである。

それでも茜沢が気分を害した様子はなく、白夜の腕を取った。

「さ、レッツだゴー。」

「はああい?」

全くもって落ち武者らしくない寝ぼけた返事をして、二人は人が増えた会場へと繰り出した。

「絶対ウケルよ。人気者間違いなし。」

「でへへ〜そうですかあ?」

兜の下顔をだらしなく伸ばしていた白夜は横を見知った顔が行きすぎた事にまるで気付かなかった。

白の章 第二話 の八

音子をはじめ腐女子お三方が残ったブースは瞬く間に普段の静寂を取り戻した。

冷やかに冊子を手に取った客が、石造のような彼女等の存在に気付くや否やゲツと顔を引きつらせて足早に逃げていく。

それを数回繰り返しているうちに、その確信的な訪問者は現れた。

「あぢ〜」

からつとした初夏の太陽が高度をあげ、真夏日のような暑さだ。脂肪のぶんだけ内包熱の高い天使は滝のように垂れ流れている汗を拭きつつばやく。

音子は、だらしなく着崩したスーツから迫り出している腹を胡乱げに見やりながら「なんのようだ」と平板に尋ねた。

そのタイミングを計ったように天使の背後からヒョコつと現れた人物にさしもの音子も固まった。そも動きに乏しいので視覚変化はなかったが・・・。

「わ〜スゴイ！黒井さんホンモノの漫画家みたいね。これが黒井さんの描いた本なの？わ、ホントの漫画になってる。スゴいわ！」

内容を完璧なまでにスルーし、本気で作品を褒め称えてはしゃいでいる娘——桃瀬香里から視線を外し、音子は扇子をばたつかせている天使をみやる。

説明を求めているらしい視線に天使はしてやったりという会心の笑みをみせた。

「アンタさんがヤツを融通してくれへんのやから仕方ありませんが

な。ま、どこでどんな形であろうとヤツが有頂天になってくれればええんやから、彼女にお越し願った次第ですわ。でや、アンタさんの我侭は通るしワイの要求は通るし万々歳でんがな。で、ヤツはどこでっか？」

広域ゲージを±0に戻し、ひいては上司から誉められているところでも想像してか喜び勇んで辺りを伺う。

音子は飛び散る無数の汗に顔を顰めつつ教えてやった。

「グラビアアイドルと散策中だ。・・・私とて広域ゲージのマイナスは気になっていたのな。」

天使に悪いと思ったわけでもないが、雑作もないことなので白夜のゲージをプラスにすべくグラビアアイドルを呼びつけてやった。・・・わけだが。

無言になった二人は、冊子を手にキャツキヤとはしゃいでいる桃瀬をみやり、同時に顔を反対にそらせ、溜息を吐いた。

——つくづく間が悪いったらありやしねえ男だ。

グラビアアイドル相手に鼻の下を伸ばした少年が、気のある女生徒との鉢合わせにアタフタとうろたえる姿がまざまざと目に浮かぶ。

「仕方がない。」と独り言のように洩らし、音子は徐に桃瀬に顔を向けた。

「娘・・・桃瀬香里、今日はどのような心積もりで参った。」

桃瀬は冊子を手にニッコリと無邪気な笑顔を返す。

「えっと、今日黒井さんたちが漫画のフリマみたいのに参加するって。白夜君がお手伝いに来るけど一人じゃ大変だから手伝いに来て欲しいって、天子先生に頼まれて。・・・あ、でも天子先生今日になつて急に都合が悪くなつたらしくてここにはあの弟さんに連れてきてもらつただけど・・・」

「つまり売り子の手伝いをしてくれるというのだな？」

「売り子？わ、面白そう。初めてだけど任せ——」

言い終わらぬうちにパチンと指の鳴る音が遮った。

悲鳴を上げる間すらない。

突然飛び掛ってきた腐女子お三方に桃瀬はあつという間に取り押さえられ、上からシャツが被せられる。

「ええっ！・・・ちょ、いやあーっ！」

見えないからこそ余計妄想が駆り立てられるすったもんだと少女の絶叫。

きっかり三分。

シャツを剥ぎ取られた桃瀬はついていけない展開と自分の置かれている状況にうろたえた。

「・・・あの、私、こんな・・・」

縁に臍脂のバイアステープをあしらったぱふ袖のＴシャツに、イマドキ希少価値ともいえる濃紺のブルマ。

何故だか靴下はニーソックスでレースとリボンがコラボしたソックス留め付き。それに厚底のデコシューズ。

三つ編のズラと赤い鉢巻はともかく、ナニゆえか赤いマントと尖塔に星がついたステッキ。

「あ。オタク青年の間で絶大な支持を誇るネットアニメ・ブルマジヨや。」

「ほう。中々通だな。」

思わぬ露出度に桃瀬は涙目の真つ赤な顔で必死に足を隠そうと足掻く。

だが、無理。

みいゝと呻ってついにしゃがんでしまった桃瀬はマントに包まって赤い塊になってしまう。

ずざつと音がして、桃瀬の上に陰が落ちた。

縫るように仰向けに、音子が顔半分を前髪に覆った無表情で見下ろして言った。

「売り子とは人を惹き付けてなんぼ。体を張り、時に羞恥を晒してでも商品を売るのがその勤め。貴様が先ほど見せた熱い決意はその程度のものか？その程度の甘っちょろいヤツに我が子ともいえるこの商品を任せるのは甚だ不本意だ。」

殆ど強引に売り子にしておいてなんて言い草。しかも焦点が微妙にずれているし・・・

と天使は思ったが、口にするのは控えた。

桃瀬は下唇をきゅうつと噛み締めた。

だって一度は引き受けた仕事ですもの。それに黒井音子さんがヒッヒッポーで産み出した愛し子ですもの、売れ残ったら悲しむわ。

桃瀬はいまだ羞恥を残した顔で、それでも毅然と立ち上がった。

「私頑張る。頑張つて、この子達を一冊でも多くお嫁に出すわッ！」

「それでこそ愛の戦士ブルマジヨだ。」

「・・・戦士なの？魔女なの？」

「戦士で魔女でブルマなのだ。」

———そこまで売り上げに熱心なら、音子がコスプレでも寸劇でもして売ればいいのでは？・・・という事実には桃瀬が気付くことは永久になかった。

「ワイ、最悪な事態を回避すべくヤツを捜しにいつてくるわッ」

ブルマ姿故か、微妙に青春熱血スポコンドラマな展開に呆れつつ、天使は滝のような汗を流してフラフラと会場へ向かった。

白の章 第二話 の九

「あづい……」

遠く聞こえるアニメソングを聴きながら、茜沢と共に当てもなく場内を彷徨っていた白夜は脱水症状と疲労で直ぐに足元を覚束無くさせた。

ブースは建物内に限定されているが、外ではイベントのようなものが催されていて、コスプレ姿も多数ある。

太陽はさらに高度を上げ、会場はさながら灼熱ジゴク。鎧は重いし、熱が凝って暑いし。

「やーん。その動き方、迫真の落ち武者っぽくてナイスッ!」

「……そ、そうですか。で、へへ……」

豊かな胸を押し潰す勢いで腕にギュウギュウしがみ付かれているというのに、いかんせん籠手の所為でまるで感覚が無いのが虚しい。無邪気に誉めそやされ、まさに落ちてしまいそうな状態にも関わらず染み付いたフェミニスト根性でつい笑顔を返してしまう。頼宛の所為で表情など見えないが。

気を失うにはまだ僅かな余裕があったが、これ以上歩いていられないと倒れる決意を固めた瞬間、後ろから

「すいませえん」

と声かけられた。

若者の盛り場でも見劣りしないような可愛いギャルの二人連れだ。

「写真を撮ってもよろしいですかあ？」

「ええ。良いわよ。」

屈託ない笑顔で撮影を強請るギャルに、茜沢が愛想よく受け答える。心得たもので、少女達からカメラを受け取り、ホラ並んで並んどにわかカメラマンと化す。

手引きに応じてそそくさと構図を作りながら、一人が「あ、どうせなら・・・」といきなり駆け出し、鎧姿が勇ましい將軍様と戻ってきた。

白夜は要求に応じてズバツと切られ——ハイ、パチリ。

ついでにぐったりしたところを哄笑を上げた將軍様の足蹴にされて

——ハイ、チーズ。

ギャル二人が「アリガトウございましたあゝ」と去っていく頃には周囲に名將連れのギャラリーが順番待ちの列を作っていた。

音子の言を肯定するように、主役は何人もいるが脇役は唯一人で、落ち武者は引く手数多の人気者だ。

茜沢はカメラを返す都度「是非ブース99ラブボへお寄りくださいませ〜」と言い添え、ドサ周りとしては中々よい仕事ぶりといえた。

カメラ撮影が一頻りになる頃には白夜がのっぴきならない状態で、二人は一先ず敷地の端にある植え込みの日陰へ移動し休憩を取ることにした。

ほとほと疲れきった白夜に茜沢がブリックのイチゴミルクを用意し

てくれた。

兜の取り方も分からない状態で、ストロー付きはありがたい。
バカキャラがブームのげーのー界で、こんなふうにさり気無く人間的な気遣い出来る茜沢に高感度が増す。

——顔も可愛いし、スタイル抜群だし、言うことないよね。
きつと料理も上手いはず。

そして甘えさせ上手の姉御肌。

ひょっとして俺の赤い系はこの娘と繋がっていたのか。
ってことはこの出会いはベーターベンですかっ！？

それは運命。

一人勝手に盛り上がっていた落ち武者は、茜沢が茂みに不可解な視線を向けていることに気付いた。

不思議そうに身を乗り出し、白夜もすぐにそれに気付く。

躑躅の根元にポコポコと穴が開いている。

「セミとかカニとかが出てきた跡みたい。」

「・・・こんな大きなヤツはいないと思うけどね。」

礼儀的な突っ込みをしつつ白夜も茜沢の感想に共感する。

穴は植樹を無造作に引き抜いた程の大きさで、無造作ながらも作爲的に撫で付けられたような跡があり、何かを引き抜いたというより何かが這い出てきた、といった感じた。

その時、不意に人の気配が近づき、二人は揃って顔を戻した。

五人ばかりの各種名将がご自慢の得物を手にぞろぞろと歩いてくる。

「もーしわけありませんがぁ〜今休憩中で・・・」

すかさず笑顔で対応する茜沢の正面で、侍の腕が機械仕掛けのよう

にユルユルと持ち上がった。

二人はその仕草の意味が理解できずポカンとする。

次の瞬間――

ぶんっ

風の唸りを上げて刀が勢いよく振り落とされた。

白の章 第二話 の十

「うわあ。マミリン大丈夫っ？」

間一髪、後ろへ飛び退った茜沢は威嚇のポーズをとったまま、白夜に小さく呟く。

「こいつ等、オカシイよ。」

普通、どんな防衛策をとっていいようが生き物である以上危険に対峙すれば少なからず防衛本能が働く。なのに眼前に居並ぶ武者にはまるで己を守るうという意思がなく、隙だらけなのだ。

そのくせ攻撃力は驚異的。今の一撃をマトモに食らえば骨まであつけなく砕かれたはずだ。

何よりおかしいのはその動き――

「うわあ。」

「落ち武者クンツ！」

横から迫ってきた武士の一人が無造作に白夜に手を伸ばす。それに驚いて白夜は反射的に腕を振り放った。

意図せずして籠手が相手の兜を弾き、その面が露になる。

二人は絶句した。

陽光を乱反射するプリズム効果。背景を透過する滑らかな曲線。

「ナニ、これ」

言う一言はそれに尽きる。

頭部があるはずのそこにあつたのは髑髏だ。
しかも骨ではなく透明な。

「髑髏水晶……？」

有名なものではマヤ文明で発見されたオーパーツ。

当時の技術レベルを無視して作られた水晶の加工品だ。

水晶はモース硬度7とかなり硬い。しかも自然軸を無視して加工すれば割れや輝が入る。

その水晶を、道具の跡も無く髑髏の形に削り出しだけでも驚異なのだが、コレまでに発掘された髑髏水晶は、内部に複雑な光学細工が施され、左右が極めて対象ときている。

閑話休題。

マトモな頭が無かったことを驚くべきか、スーパーテクノロジーの遺物を目の当たりにしたことを驚けばいいのかはともかく、コレは明らかな異常事態、差し迫られている状況からして生命の危機だ。

籠手を掴むマミの手にぐつと力が入る。

その意図するところを察して白夜も頷く。

鎧武者がずいっと間合いを詰める。

その動きは、まるで初期型二足歩行ロボットのようにぎこちない。
驚異的な破壊力だが、動作の全ては限りなく緩慢だ。

「今だよ。落ち武者クンツ！」

攻撃が繰り出される前に茜沢は、敵の懷に飛び込み、容赦ない蹴りを胸に炸裂させる。

鎧武者は倒れることこそ無かったが不測の攻撃に対応しきれなかったように僅かに動きを鈍らせた。

その隙を突いて二人は脱兎のごとく駆け出した。

他の武者たちも標的を追いかけたが、やはり振り向く時に時間を要していた。

つまりこれは、そう——たぶん傀儡なのだ。

一先ず危機を脱出した白夜はほっとして後ろを振り返り、ぎえっと叫ぶ。

武者の足裏からローラーが出てきて、踵からロケット噴射が……。

「ヒッキョーっ！」

振り向くのに時間を要した武者共はハイテク機能で追いつけてくる。

必死になって駆けたが、方やグロッキーなヤラレ侍。

あっけなく追いつかれ取り囲まれた。

「おおッ！落ち武者が名将達に囲まれている。」

「さてはあの落ち武者、知る人ぞ知るとある大国の將軍なのだーっ！」

イベントで盛り上がっていたギャラリーが、騒ぎに気付き、勝手な声援を送る。

勿論、彼等はコレもイベントの一つと信じているのだ。

武者共は、ギャラリーには目を向けず二人に襲い掛かる。

否、詳細には白夜に。

茜沢は、その間に立ちはだかっているの、必然的に攻撃対象にされているだけだ。

「どうやらこいつ等の目的は落ち武者クンみたいね。心当たりは？」

「えっと・・・落ち武者だから？」

「・・・かもね。」

茜沢は溜息を吐きつつ、周囲を囲うギャラリーに「刀貸して！」と叫んだ。

名将から刀を受け取り、青眼の構え——振り落とされた敵の刀をかわし、その胸へ一閃をひらめかせる。だが、ガンという重い手ごたえがただけで武者はびくともしない。

「く・・・なんて頑強なのッ！」

腕の痺れを堪えて茜沢は悪態を吐いた。

「あんな格好をしてるけどアレはやんごとなき国の姫なのだーっ！」

「姫格好いいぞ！がんばれー！」

周囲は勝手に物語を構築して俄然盛り上がる。

「よぉーし。それなら俺も！・・・マミリン下がって！」

雰囲気の人一倍流されやすい白夜が腰の剣を抜いて、意気揚々と進み出た。

——スパッ

「ひよわわ・・・」

構えた剣は武者の一刀両断にものの見事に真つ二つ。

いきなり短剣になってしまった刀を見詰め震え上がっていると、茜沢の切迫した声が鼓膜を打った。

「落ち武者クン危ない！」

「へ？」

視線を上げて凍りつく。

眼前の武者が大きく腕を振り翳していた。

万事休す。

間髪いれず振り下ろされた刀に白夜はぎゅっと目を瞑った。

白の章 第二話 の十一

ギャラリーから、おおっ と歓声とどよめきがあがった。

覚悟していた衝撃はついぞ訪れず、周囲の声に唆されるようにして目を開ければ武者の腕が刀毎大地に転がっていた。

籠手の中身がまるつきり空洞なのをみて、やはり傀儡か、と確認する。

「うおーい。大丈夫かいな。」

「て・・・天ちゃん。」

武者の腕を叩ききりブーメランのように戻ってきた輪をキャッチするのは、着崩れた守護天使。

大儀そうな質問に白夜はへなへなとその場にくずおれた。

「ひよほーっ！MIBまで登場だ！」

「なんと！するとこれは戦国時代に見せかけた時空警察物語だったのかっ！」

「凝ってるー！」

妄想をあらん方向へ驀進させ、ギャラリーの熱気はもはや最高潮。

「天ちゃんこいつ等ナニ？」

「コイツ等はソウルエネルギーで動いとるネオメタルの傀儡や。」

「ソーラーエネルギーでレアメタル、じゃなくて？」

首を傾げる白夜に天使は「ちゃう」と短く応え、再度金の輪を放った。

放物線を描いた輪が偶然のタイミングで侍の首を刎ね上げる。

「ぎええっ」

転がってきた頭に白夜は死に損ないのゴキブリみたいに後ろへ這いずる。

天使はすかさず大地に平伏した胴体へ駆け寄り、受け止めた輪でザクザクと切り始めた。

「おう、あつた。」

滝のような汗を拭いながら輪切り侍の胸部付近からビー球ほどの宝石——赤いルビーのようなものを摘み出した。

「コレがネオメタルのポリプや。」

「ネオメタルの・・・ポリプウ？」

ポリプといえば珊瑚礁を形成する核のようなものだ。

「せや、こいつ等はチツチャイ金属生物の集合体や。もともと別空間の生物やつたらしいが今じゃ絶対神ではなくてはならない素材としてあらゆる分野で重宝しとるで。」

「生物？金属の？」

「せや。ま、ここの金属のどれとも違うけど分類上は金属や。」

いいながら天使は再び輪を投げ放った。

しかし偶然は度々起こらず、空を切って戻ってきた輪を受け止め悔しげに地団太を踏む。

その間にも侍はジワジワと距離を縮めている。

「あゝ説明は後回しや。とりあえず、そのソウルエネルギー回収してブース戻ってくれへんかあ。多分ヤツがなんとかしてくれるさかいに。」

「ヤツとか・・・本人の前じゃ腰低いくせに」。ってか、コレ持

つてくのお？うう、触りたくないな。」

躊躇している間にも二つ目の髑髏が大地に転がった。

経緯を見ていた茜沢が、ナイス運動神経で名将を討ち取ったのだ。

「それエネルギーやで。傀儡がこの程度やから大した出力でもないんやけど髑髏水晶ならダム一個分くらいのエネルギー軽く出しよるま、ここのテクノロジーじゃ使われへんけど万が一にも悪用されたら危険やさかいな。」

説明を耳にした白夜はせっかく拾った髑髏を放り投げ、ブルブルと首を振った。

「そんな物騒なもん持てるかつ」

「せーやーかーらー、使うにはそれなりの機器が必用なんやて。そのままやったら単なる水晶だから安心せい。」

尤も異空間の代物なので実際には水晶と成分が違うのだが、ここの科学レベルでは水晶としか断定されないに違いない。

これまで発掘された髑髏が全て水晶でまかり通っているのがその証拠だ。

「落ち武者クン！何がなんだかわかんないけどこの人の言うとおり早く逃げてっ！じゃないと私たちも何時まで持つか分かんないよ！」
茜沢が怒声を張り上げる。

武者の動きは鈍いが、鎧は固く、弱点であり致命傷ともなりうる首を唯一狙うのは困難を極める。

「わ、わかった。」

二人を置いていくことに良心が咎めなかったわけではなかったが、残ったからとて何の役にも立ちはしない。

それならば音子のところに戻って、助けを請うほうがよっぽど勝算が高いはずだ。

——音子の實力などまるで知らないけれど。
なんとなく。
多分。

なんとかしてくれそう？

覚悟を決めた白夜は二つの髑髏を拾って走り出した。

天使が武者の前に立ちただかり大音声を轟かせる。

「ここは譲らへんでえっ！さあ、どっからでもかかってこいや！」
MIB格好いいぞーっ　と、いうやんやの声援の中、侍の足裏から
ローラーが飛び出す。
そして

ぶおっ！

爆音とともに踵からロケットエンジンを噴射させた侍達は、天使を
顧みることなく白夜の後を追いかけて建物の中へいつてしまった。

「いきなり走るなんてヒキョウやでえ〜」

見るからに運動不足のMIBは、不満というより悲鳴を上げて、泣きながらその後を追いかけた。

白の章 第二話 の十二

「く・・・クロちゃ、ん・・・助けて」

重い鎧を着けて命からがら走りきった白夜はブースに来て力尽きたようにテーブルに突っ伏した。

「髑髏水晶が、・・・侍で、・・・追われて」

「・・・あの、黒井音子さんでしたらちよつと出かけてくるって、今しがた・・・」

恐縮したような声は音子とは似ても似付かぬ愛らしいもので。

なによりその内容に、ええっ！と飛び起きた白夜は、我が目を疑ってフリーズした。

何故ここに桃瀬よ？

こんなところにとというのは甚だ失礼だが、オタクの祭典というべき場所に何故桃瀬がいるのか。

しかもその格好・・・――

オタクのみならず世の男共を秒殺せんばかりのブルマー姿ではないか！？

さらに露出度の高い水着より、ブルマーやミニスカの生足にこそあるこの脅威は何なんだろう。

永遠の謎。

・・・・・・つまるところ大っっ好きです！ブルマ。

どうやら声がくぐもっていた所為で白夜だと判別できなかったようで、落ち武者の凝視に桃瀬は顔を赤らめモジモジとマントで足を隠そうとする。

「いゃん、そのチラリズム。」

白夜は兜の下顔をだらしなく伸ばす。

だがそれも束の間。

「大丈夫！？落ち武者クン！」

背後から追ってきた声に白夜は飛び上がった。

心配した茜沢が優秀な脚力で後を追ってきてくれたのだ。

ちなみに天使はずっと後ろでまだ陰も形も無い。

「いえ、これは浮気などではなく・・・その、すごぶる真面目に愛しています、ブルマー・・・いえ、きょぬー・・・」

誰も聞いていない言い訳は、直ぐに少女の悲鳴に掻き消された。

追いついた侍の一人が桃瀬を羽交い絞めて宙に吊り上げる。

「ひっ・・・」

苦しさに顔を歪めて後ろを見た桃瀬は兜の下透明な髑髏に小さく呻き、そのままガクリと頭を垂れた。

「わ、桃瀬っ！」

駆け寄ろうとした白夜の前に武者が立ちはだかる。その後ろにも一人。

茜沢が滑り込み、白夜と背をあわせる形でそれに対峙する。

「……一体、何人いるのよ……」

後から彼らの仲間と思しき武者がそろそろと集まり、総勢十人ほどが二人を包囲する。

ようやく到着した天使は輪の外から手も足も出ない状況を見て臍を噛む。

多勢に無勢。

さすがにこの人数差は分が悪い。

白夜の動きを封じた後、武者の一人が前に進み出た。
ぎこちない仕草で剣を抜き、向かった先は桃瀬のところだ。

白刃の切先がピタリと白い喉下に焦点を合わせる。
それが、ひと思いに薄い体操服を引き裂いた。

「や、めろっ！」

迸った悲鳴に腕がピタリと止まる。

次の言葉を待つようにフリーズしたままの侍に、白夜はひゅっと思を吸い込み、震える声を吐き出した。

「お、俺が……代わるから。」

なるべく平静を装ったつもりなのに声は無様なほどか弱く掠れた。

「うおう、落ちても侍。格好イイぞーっ」

手に汗握るアクションとブルマジヨの見えそうで見えない胸に釘付

けになっていたギャラリーが、シリアスな展開に感激して声援を上げる。

・・・しかし残念ながら今はそれどころではない。

人事な観衆にイラつきながら、天使は必死に言い募った。

「アホウ！そんなこと許されへんで！オマエさん自分の立場わかつとるのかいな！」

「で、でも・・・・・・だって、じゃあ桃瀬を見殺しにするのっ！？」

今更ながらに思い知る。

こいつ等は平気なのだ。人を傷付けるのも殺すのも。

彼等の目的が、単に白夜を捕えることだったから無駄な殺戮は避けられただけで、ひょっとしたら茜沢だって天使だって殺されていたかもしれない。運がよかったただけだ。

「俺に用があるなら俺が行くから。・・・だから桃瀬は離して。」

ノーモア戦争なんてご大層な思想はない。

だけでも少なくとも、自分の所為で他人が傷つくのを黙って見過ごせるほど冷血漢にはなれない。

「このすつとこどつこいがっ！たとえ何人の命犠牲にしようてもオマエさんを捕らえられるわけにはいかんのやつ！」

「・・・・・・なんで」

声が震えた。

きつと兜の下顔は泣きそうに歪んでいる。

「天ちゃんが・・・なんでそんなこというの。天使のくせにオカシイじゃん。」

反抗期の子供みたいにそういつて白夜は自ら武者に歩み寄った。

白の章 第二話 の十三

桃瀬に白刃を突きつけている將軍の前に立ち、意地とばかりにその意思のない顔を睨み付けようと顔を上げる。

その時。

「か弱き一つの魂を救わんとするその高貴な志は大変に結構。だが、アヤツの言い分も否定しがたい理なのだ。」

いきなり背後で声がした。

驚いて後ろを振り返るよりも早く、風に浚われるような感覚で体が後ろへ引き摺られていた。

武者の振り下ろした腕が間一髪で鼻先をすり抜ける。

「うおー！ホンモノの魔女登場！」

「いや、秘密結社集団だあ！」

「一体どこへ展開していくんだーっ？」

黒いマントを頭から被った四人組。

怪異は視覚的なものばかりではなく、裡から滲み出るオーラから怪しい。

音子の登場に白夜はほっとしたのと腹立たしいのと複雑な気分できとりあえず口を尖らせ文句を言った。

「ねーまさか着替えのために席外してたとかいう？その間、どんな目にあってたと思ってんだよお。」

先頭に立つ黒魔術師はスマンというように兜を撫でた。

まるっきりの子供扱いだが、白夜は当然のように受け止め機嫌を直

す。

「私が来たからにはもう案ずることはない。」

白夜は鼻先に突き付けられた剣に一瞬きよとし、次いで顔を背けはあと深い溜息を吐いた。

「・・・やっぱり俺？つていういか俺？」

「当然。何故なら私目は裏舞台で暗躍する程度のしがない魔術師。方や貴殿は落人に身を竄いているとはいえ、とある大国を統べる大将ではござらんか。」

「ござらんかつて、・・・また妙なスイッチ入っちゃつて。ま、それはいいけど。ともかくさ、刀なんかじゃヤツラに全く歯が立たないんだよね。」

「心配無用。」

言つて、音子はフードの下の視線で武者共を舐める。

「ヤツラを形成するポリプの純度は精々見積もっても60%だ。対して貴殿が今手にしている聖刀のポリプはアシヨカ王の柱とほぼ同等——」

「99・72パーセントツ！？」

「その通りだ。」

ちなみにいうと、この金属生物も異空間のものなので実際には成分は微妙に異なるのだが。

アシヨカ王の鉄柱を鉄と断定しているここの科学レベルではあくまで鉄と表現するのが相応しかろう。

「ほんな説明後回しにしい。はよ動き。」

蚊帳の外でじれったそうにジタバタする天使に白夜は冷たい視線を向ける。

「なんやその目。ひょっとしてさっきの言葉まだ気にしとるんかいな。」

「だつてえ」

責めるような目で天使を睨むと、意外にも平板な声が間に割って入った。

「苦言申し上げるが、將軍よ。アヤツの言い分もあながち的外れとはいいますまいよ。」

白夜は魔道師を振り返る。

「御身が悪者の手に渡り悪用されることがあれば、この世は阿鼻叫喚の暗黒を迎えること必須。さすれば、守ろうとした唯一つの命ですら易々と闇の手中に堕ちること必然——」

淡々と言葉を紡いでいた唇がうつそりと釣り上がる。

「残念ながら貴殿の命では一つの命も購えないのが事実。ただ一つの命、さらにはその双肩に抱える草民、否この世の全てを守るには、貴殿がヤツラ的手中に落ちぬことが絶対条件。」

核爆弾だ、といった天使の言葉が不意に脳裏に過ぎった。

安易にこの命を投げ出せば全てが丸く収まるわけではないのだ。

寧ろ投げ出した途端、想像を絶する惨事が引き起こされるかもしれないわけで・・・強いてこの命を喻えれば汚染廃棄物？

「・・・ゴメン天ちゃん。天使のくせにとか・・・」

ポーナスポインターを優遇するあまり、他の命をあっけなく切り捨てるのだと誤解した。

だけど、天使はやっぱり万人の天使であつて、被害を最小限度にとどめるべき果斷だったのだ。

「ええて。ワイも潔すぎたわ。・・・それよかマジでハヨせいや。ヤツラ動きよったで。」

その言葉に視線を巡らし白夜は　ぎえっ　と顔を引きつらせた。
十人ばかりいた武者たちが二人ずつ合体し、さらに剛健そうな巨体
になっている。

その頭は二つ。

「なんて凝った趣向だっ？　すっげー！」

観客がどよめく。

白夜は慄く。

人数が減ったと喜ぶべきか。

しかし、威力二倍でとても喜べそうに無い。

双頭の白熊みたいな侍が一斉に白夜に襲い掛かった。

「ぎええええ」

我先にと伸ばされた豪腕に白夜は無意識に刀を翳し、ただ絶叫した。

だが、ずしっという衝撃が加わっただけで、思ったような痛みは何
時まで経っても襲ってこない。

恐る恐ると目を開いてみてきょとんとする。

先ほどまでしなやかなカーブを描いていた細身の大刀が、盾に変わ
っていた。

「うおう。こつちもすげーぞ！」

ブラボーという声援の中、天使はその光景に啞然と呟く。

「なんやて・・・まさか新種ポリプかいな。」

武者たちは獲物を捕獲しようとして躍起になって手を伸ばす。それはも
はや攻撃だ。

ソレを見て天使は慌てて叫ぶ。

「どでもええから攻撃しかえせい。」

「どーでもって言ったって・・・っ、これどうすればいいの？ってか、どーなっちゃったわけっ？」

攻撃しようにもこれは盾。

泥水を傘で避けるように盾を動かし防御に徹する。

「ポリプは生き物やから言葉で意思疎通を図ることが出来んのや。せやけどワイ等のつこうとる言語じゃなくて共通語・・・例えばコンピューターなら二進法とか、あるやろ。んで話をするちゅーのは、コッチの感覚からするとプログラムするちゅーことに似とるかな。」

「俺、今、パソコン持ってなあーいっ」

盾を掻い潜り右から突き出てきた腕に、白夜は悲鳴と共に後ろへ飛び退く。

天使は茜沢の加勢に加わりながら、白夜に向かって説明を続けた。

「よう聞き。今、オマエさんの持つとるんは多分、新種ポリプや。発見されたんはつい最近やけど、従来のヤツの祖先とも言われとって、言語を介する変わりに持ち手の思考を読み取るやつや。」

「っ、つまり考えていることを具現化できるってことっ？スゴいじゃない！」

「そもそも数が少なくて殆ど一般には出回らん貴重なやつやなんやけどな。ともかくポリプはごっついプライド高こうて言う事聞かすんは中々難しいんや。調教師が厳しく躾けよんのやが、飼い主にも反抗的なのが多いらしいで。」

「駄目じゃんっ！」

白夜はわーんと泣き叫ぶ。

そこへ一筋の光を齎す声が。

「そればかりとは言えまいぞ。」

戦いが始まって早々、脇に退いて観戦を決め込んでいた自称暗躍専門の黒魔術師——黒井音子だ。

「どうやらその気難し屋は貴殿が気に入ったようだ。試しに何か願ってみたらどうだ。」

「なっ・・・！」

天使が絶句する。

「ホントゝそれなら」と早々と乗り気担っている白夜に慌てて顔を戻す。

「待て待て待て！思考つてのはそんなに簡単なもんやないねんで！」
「大丈夫だよ。たたく天ちゃんてば心配性なんだから！」

笑いながら、任せて、と言って白夜が想像に勤しみだす。

天使はアホーッと内心で突っ込む。

よほど賤られていても小さな雑念まで拾って、妙なカイブツを作り出すのがこの新種の厄介なところだ。

モノによつては持ち手の深層心理までに入り込み、思考とはまるで別な、もっと禍々しいものを具現化してしまったりする。

ともかく周囲にも持ち手にもリスクが高い代物であるのは間違いない。

白夜の両手で構える盾が、波に浚われる砂のようにサラサラと形を変え始める。

「おおっと！落ち武者は一体ナニを造るのかッ！」

「ここはやっぱりブルマジヨの天敵・死神伯爵の武器、デスサイズですよ。」

「いや侍なら侍らしく妖刀ムラサメだーっ！」

ネオメタルが暴発のように容量を増した。

拳を突き上げ声援を送っていた観衆は、出来上がった「武器」らしき代物に静まり返った。

白の章 第二話 の十四

誰かの呟きがポツリと落ちる。

「・・・ブルマジヨ」

そこには、武者に囚われているブルマにマント姿の桃瀬香里と瓜二つのものが顕在していた。

白夜は得意げに胸を張りちゅちゅと指を振る。

「侮るなかれ！カノジヨの馬力は百万倍。武道の達人。音速の瞬発力。モチロン、魔法も使えますう！」

では、魔法披露っ！という言葉にブルマジヨ桃瀬は持っていた星ステッキをクルクルと回しだす。

途端に、コスチュームからリボンがシルシルと飛び出し彼女の体を包む。一瞬、繭のようになって解けた時には、ブルマから戦闘コスチュームのスクール水着に変身していた。

「うおっ！これぞホンモノのブルマジヨだ！」

野太い声援絶好調。

ちなみに本家本元のブルマジヨの魔法もあくまで自分のコスチュームを代える時のみに使用され、戦闘には使用されない。

「さあっ！手加減ご無用っ！ガッツといっちゃってえ桃瀬、・・・じゃなかった戦士ブルマジヨ！」

伝書鳩でも投げ放つように白夜はせいつとブルマジヨを放った。声帯までは持ち得ないのか、ブルマジヨは「はあい」と、口パクで応えて、勢いよく飛び立った。

が、着地と同時に石像のように動きを止めた。

「ちなみにな。持ち手の思考を読み取るヤツなので、放れると何も聞かんぞ。」

「それ先に言つて。」

はああ・・・と、深い溜息を吐きながら白夜はブルマジヨの手を取った。

途端、ブルマジヨは再び勢いよく動き出した。

「うわおっ！」

振り放されそうになって思わずしがみ付くと運がいいのか悪いのか背中に飛び乗ることになった。

「わ、わ、わ、ちよっ、待っ・・・！」

そんな泣き言切捨てヨっ　と、ばかりにブルマジヨは、慌てふためく落ち武者をおんぶしたまま敵に突進する。

初期設定どおりの俊足。

瞬く間に双頭の武者に肉薄し、高らかにジャンプ――

ドシャツ！

鉄兜と水晶を蹴り上げる鈍い音が二つ。

百万馬力の健脚が双頭を一気に吹っ飛ばす。

「のええええ――っ！」

大声援の中、ブルマジヨは着地と共に身を翻し、背後に迫っていた

武者の巨軀に全体重を掛けたクロスアッパーを炸裂させる。

ドオオオオオオオオ

大地を揺るがせ、後ろへ吹っ飛んだ武者の頭部が、兇刃ともいえる手刀によってポロリと？げる。

「や、待つ、落ちるうゝつ」

ブルマジヨは悲鳴を上げる白夜を背負いなおし、されど勢いを落とさぬまま三人目の敵へ。

体当たりを食らわしてひっくり返ったところに上から飛び乗り首を太腿で挟む。

うらやましいッ！

白夜を含め周囲の（特に男性）ギャラリーが胸の内で声高らかに叫んだ本音は、擦じ切られて大地を転がった頭によってすぐさま雨散霧消した。

桃瀬^{ホンモ}に兇刃を突きつけていた武者が、味方の劣勢に業を煮やしたようにユラリと動いた。

茜沢が駆け出す。

「あ、何処行くねん！」

双頭の一つを落とした武者と対峙していた天使が慌てて叫ぶ。

武者の目的はあくまで白夜のようで、向かってくる茜沢には目もくれず、二人は擦れ違った。

その頃、落ち武者をおんぶしたブルマジヨも音速といわれる足で武

者に切迫していた。

ブン――

風を切って振り下ろされた刀をブルマジヨは横に躲す。

「ヒイツ！」

遠心力で残された白夜の鼻先を紙一重で尖塔がすり抜ける。

ふわっ……と、無重力を感じた次の瞬間、

「ぎいやあああああああつ！！！！！！」

凄まじい突き上げに、白夜は打ち上げ花火よろしく空へ舞った。

ブルマジヨの頭突きを顎に食らった侍の頭部も一緒に大空へ舞う。

同刻――

「せいやっ！」

裂帛の一太刀と共に髑髏が二つ跳ね飛んだ。

一つは天使が相手をしていた巨体の双頭の残りで、もう一人は桃瀬を捕らえていた侍のものを茜沢が。

侍を討ち取った勇敢な少女の頭から着地と同時に帽子が落ちる。

「あーっ！グラビアアイドルの茜沢マミリンッ！」

誰かの絶叫にギャラリィが色めき立つ。

「すげー！可愛いだけじゃなくて格好イイぞっ」

「マミリン、握手して」

それまで存在感もなく脇で傍観を決め込んでいた秘密結社の魔術師集団がここぞとばかりに現れ出でて、茜沢に詰め寄るギャラリィ達

を制する。

「……ステキ。」

茜沢が侍の首を討ち取る直前で覚醒した桃瀬は、その勇姿に薄っすらと目元を染めて、恋する乙女みたいに呟いた。

「うう……俺の活躍は？」

白夜は、誰に顧みられることなく、大地にへしやげたまま暗涙する。

「おい。いつまでもそんなところで暢気に寝とらんと、オマエさんもハヨ髑髏回収手伝ってな。」

駄目だしのようにな天使にせっつかれ、何もかにも諦めた白夜は、痛む体に鞭打って髑髏回収に精を出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0909i/>

LL (Love Lab)

2010年10月10日05時50分発行